

鞠智城跡

— 第29次調査報告 —

Copyright by Bord of Education, Kumamoto Prefectural Office

2009年3月

熊本県立装飾古墳館分館

歴史公園鞠智城・温故創生館

鞠智城跡

— 南側土塁線・貯水池跡池尻部・深迫門跡西側一帯の調査 —

2009年3月

熊本県立装飾古墳館分館

歴史公園鞠智城・温故創生館

序 文

鞠智城跡は、東アジア情勢が緊迫した7世紀後半に、大和朝廷により築城された古代山城の一つです。全国でも有数の重要な遺跡として、平成16年2月27日付けで国史跡に指定されました。同様の遺跡として、九州では、大野城跡（福岡県）、基肆城跡（佐賀県ほか）、金田城跡（長崎県）の三城があり、いずれも国の特別史跡に指定されています。

現在、熊本県教育委員会においては、遺跡の保存と活用を図るため、平成12年度から県総合計画での「歴史公園の完成をめざして」を目標に、発掘調査の継続と、その成果に基づく整備事業の推進に取り組んでおります。

本書は、昨年度に実施した第29次調査の成果をまとめたものです。

発掘調査の実施にあたりましては、文化庁及び鞠智城跡保存整備検討委員会の諸先生方からご指導をいただくとともに、山鹿市教育委員会並びに菊池市教育委員会、また、地元の皆様など多くの方々のご協力を賜りました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成21年3月18日

熊本県教育長 山 本 隆 生

例 言

- 1 本書は熊本県教育委員会が平成19年度に文化庁国庫補助事業として実施した発掘調査報告書である。
- 2 調査の実施にあたっては、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」が担当した。
- 3 調査期間は、平成19年7月3日から平成20年3月31日までである。
- 4 発掘調査は長尾至明、矢野裕介、前川真由美が担当した。
- 5 現地調査における測量、遺構実測、遺物の取り上げについては、長尾、矢野、前川が行い、4級基準点測量及びメッシュ杭設置業務を株式会社ダイチプランに、地形測量及び遺構実測の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 6 現地調査における写真撮影は、長尾、矢野が行い、空中写真撮影を九州航空株式会社熊本営業所に委託した。
- 7 堀切門跡周辺の凝灰岩の保存処理に伴う岩質調査は、矢野が担当し、株式会社葵文化に委託した。
- 8 遺物の整理・実測及びトレースについては長尾、矢野、前川、大村ひかりが担当し、菊川直美、高田とし子、宮本和美の補助があった。
- 9 本書の執筆は、主として矢野が行い、第I章第3節3を木崎康弘、第II章第2節・第III章第2節を長尾が行った。
- 10 本書の編集は、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」で行い、矢野・長尾が担当した。

凡 例

- 1 本書に掲載している遺構図の平面座標は日本測地系による。
- 2 現地での実測における縮尺は、遺構の平面図を1/20、断面図を1/20、トレンチ配置図を1/100とした。
- 3 掲載遺物については、実寸トレースで行い、縮尺を1/3とした。
- 4 遺物写真については、縮尺を1/3とした。

本文目次

第I章 調査の概要	
第1節 調査の経緯及び組織..	1
1 調査の経緯	
2 調査の組織	
第2節 位置と地形..	2
1 遺跡の位置	
2 遺跡の地形	
第3節 調査の方法及び経過..	4
1 調査の方法	
2 調査の経過	
3 鞠智城跡出土の石器類	
第4節 これまでの成果..	9
1 土塁線の調査	
2 貯水池跡の調査	
第II章 調査の成果	
第1節 南側土塁線東端平坦部の調査..	17
1 トレンチの設定	
2 遺構について	
3 出土遺物	
第2節 貯水池跡池尻部の調査..	21
1 トレンチの設定	
2 遺構について	
3 出土遺物	
第3節 深迫門跡西側平坦部の調査..	35
1 トレンチの設定	
2 遺構について	
3 出土遺物	
第4節 深迫門地区南外郭線平坦部の調査..	43
1 トレンチの設定	
2 遺構について	
3 出土遺物	
第III章 まとめ	
第1節 鞠智城跡の外郭線について..	51
第2節 貯水池跡の池尻部について..	52

挿 図 目 次

第 1 図	鞠智城跡周辺地形図..	3
第 2 図	鞠智城跡全体図..	5
第 3 図	鞠智城跡出土の石器類①..	10
第 4 図	鞠智城跡出土の石器類②..	11
第 5 図	西側土塁線全体図..	12
第 6 図	南側土塁線全体図..	13
第 7 図	貯水池跡全体図..	15
第 8 図	28 トレンチ D 地区南壁土層図..	16
第 9 図	南側土塁線東端平坦部全体図..	17
第 10 図	南側土塁線東端平坦部トレンチ平面図..	18
第 11 図	南側土塁線東端平坦部トレンチ断面図..	19
第 12 図	版築盛土土層図..	20
第 13 図	貯水池跡 41 トレンチ位置図..	22
第 14 図	貯水池跡 41 トレンチ周辺地形図..	23
第 15 図	貯水池跡 41 トレンチ全体図..	24
第 16 図	貯水池跡 41 トレンチ土層図..	26
第 17 図	北側水路内集石状況..	29
第 18 図	貯水池跡 41 トレンチ出土遺物①..	31
第 19 図	貯水池跡 41 トレンチ出土遺物②..	32
第 20 図	貯水池跡 41 トレンチ出土遺物③..	34
第 21 図	貯水池跡 41 トレンチ出土遺物④..	35
第 22 図	深迫門跡西側一帯地形図..	36
第 23 図	深迫門地区 I・II 区平面図..	37
第 24 図	深迫門地区 I 区トレンチ土層図..	39 ~ 40
第 25 図	深迫門地区 II 区トレンチ土層図..	41 ~ 42
第 26 図	深迫門地区 I 区 2 トレンチ出土瓦..	43
第 27 図	深迫門地区 III・IV 区平面図..	44
第 28 図	深迫門地区 III・IV 区トレンチ土層図..	45 ~ 46

表 目 次

表	遺物観察表..	48 ~ 49
---	-----------------	---------

図版目次

- 図版 1 鞠智城跡全景（南東から）
- 図版 2 鞠智城跡（垂直）
- 図版 3 深迫門跡周辺調査区全景（西から）
- 図版 4 上 貯水池跡調査区全景（北から）
下 貯水池跡調査区全景（南から）
- 図版 5 上 南側土塁線東端平坦部トレンチ全景（北から）
下 深迫門跡西側一帯トレンチ全景（垂直）
- 図版 6 上 土塁検出状況（北東から）
中 土塁検出状況（北から）
下 土塁版築状況（西から）
- 図版 7 上 土塁南側断面（北西から）
中 土塁中央断面（北西から）
下 土塁北側断面（北西から）
- 図版 8 貯水池跡 41 トレンチ全景（垂直）
- 図版 9 上 ① トレンチ土層断面 a（西から）
中 ① トレンチ土層断面 b（西から）
下 ① トレンチ土層断面 c（西から）
- 図版 10 上 ① トレンチ土層断面 d（西から）
中 ① トレンチ土層断面 e（西から）
下 ② トレンチ土層断面 a（南西から）
- 図版 11 上 ② トレンチ土層断面 b（南西から）
中 ② トレンチ礫群（南東から）
下 ② トレンチ礫群（南西から）
- 図版 12 上 ④ トレンチ地山確認状況（東から）
中 ④ トレンチ地山確認状況（南から）
下 ④ トレンチ延長分掘り下げ状況（東から）
- 図版 13 上 ⑤ トレンチ土層断面 a（南西から）
中 ⑤ トレンチ土層断面 b（南西から）
下 ⑤ トレンチ土層断面 c（南西から）
- 図版 14 上 ⑤ トレンチ土層断面 d（南西から）
中 ⑥ トレンチ完掘状況（南から）
下 ⑥ トレンチ土層断面（東から）
- 図版 15 上 ⑦ トレンチ掘り下げ状況（北西から）
中 ⑦ トレンチ土層断面（南から）
下 第 19 次調査 20 トレンチ部分（南から）
- 図版 16 上 ⑩ トレンチ（南東から）
中 ⑫ トレンチ（南東から）

- 下 北側水路南壁 a (北西から)
- 図版 17 上 北側水路南壁 b (北西から)
- 中 北側水路南壁 c (北西から)
- 下 北側水路北壁 (南東から)
- 図版 18 上 北側水路全景 (南西から)
- 中 深迫門地区 I 区全景 (南から)
- 下 I 区- 1 トレンチ土層断面 (北西から)
- 図版 19 上 I 区- 2 トレンチ土層断面 (南西から)
- 中 I 区- 3 トレンチ土層断面 (南東から)
- 下 深迫門地区 II 区全景 (北東から)
- 図版 20 上 II 区- 1 トレンチ平面 (南から)
- 中 II 区- 2 トレンチ土層断面 (南から)
- 下 II 区- 3 トレンチ土層断面 (南から)
- 図版 21 上 II 区- 4 トレンチ平面 (南から)
- 中 深迫門地区 III 区トレンチ全景 (東から)
- 下 深迫門地区 IV 区トレンチ全景 (東から)
- 図版 22 上 須恵器 (外器面)
- 下 須恵器 (内器面)
- 図版 23 上 土師器 (外器面)
- 下 土師器 (内器面)
- 図版 24 上 瓦 (凹面)
- 下 瓦 (凸面)
- 図版 25 上 その他の遺跡 (外器面)
- 下 その他の遺跡 (内器面)

第I章 調査の概要

第1節 調査の経緯と組織

1 調査の経緯

鞠智城跡は、熊本県の北部、山鹿市菊鹿町南部から菊池市北西部にかけて所在する古代の山城である。『続日本紀』文武天皇2年(698)5月の祭の修繕記事を文献上の初見に、その後、『文徳天皇実録』天安2年(858)2月、6月の祭、『日本三代実録』元慶3年(879)3月の祭にも城名がみられる、いわゆる、「朝鮮式山城」である。現在は、熊本県が平成6年度から始めた保存整備事業により、八角形鼓楼、米倉、兵舎、板倉を復元し、平成14年度のガイダンス施設「温故創生館」のオープンを契機に、歴史公園としての本格的な供用を開始しているところである。また、平成16年2月27日には、国史跡に指定されている。

この鞠智城跡の本格的な発掘調査は、熊本県教育委員会が昭和42年～44年度に実施した第1～4次調査に始まる。当時熊本女子大学教授であった乙益重隆氏を調査団長とする「鞠智城調査団」によるものであった。その後、昭和62年度の第10次調査より文化庁国庫補助事業として毎年度継続的に実施してきた。その結果、古代山城では例をみない八角形建物跡をはじめとする72棟の建物跡や5,300㎡という広大な面積をもつ貯水池跡、版築盛土による土塁、そして通水溝を伴う水門など、城の構造解明に伴う貴重なデータが蓄積されてきた。

現在の発掘調査は、貯水池跡、城門跡、土塁線の構造解明を目的とする調査方針と、それに基づく平成23年度までの年次計画を掲げた『第2次鞠智城跡保存整備基本計画』(平成14年3月策定)に基づき進めている。第29次調査においても、本計画に基づき、「貯水池跡池尻部」、「深迫門地区南外郭線平坦部」、「堀切門跡北側平坦部」の3調査区における遺構の構造把握を目的とする本調査の実施と、広場整備を予定した「南側土塁線東端平坦部」、「深迫門跡西側平坦部」の2調査区における遺構の有無の把握を目的とする確認調査の実施を計画し、平成18年度に鞠智城跡保存整備検討委員会の審議・了承を得て実施することとなった。

2 調査の組織

1) 発掘調査(平成19年度)

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	大田 幸博 (熊本県立装飾古墳館長)
調査総括	木 康弘 (同 副館長 兼歴史公園鞠智城・温故創生館長)
調査事務	宮 秀俊 (同 文化財整備交流課長) 小佐井栄一 (同 主任主事)
調査担当	長尾 至明 (同 文化財保護主事、主査) 矢野 裕介 (同 主任学芸員) 前川真由美 (同 囑託)
調査指導	〔鞠智城跡保存整備検討委員会〕 河原 純之 (元千葉大学教授) 岡田 茂弘 (国立歴史民俗博物館名誉教授) 小田富士雄 (福岡大学名誉教授)

安原啓示（元文化庁主任調査官）
 坂上康俊（九州大学大学院人文科学研究院教授）
 板橋和子（九州ルーテル学院大学教授）
 小西龍三郎（元九州造形短期大学デザイン科教授）
 今村克彦（熊本県文化財保護審議会委員）
 【専門調査員】
 亀田修一（岡山理科大学教授）
 西谷 正（九州大学名誉教授）
 朽津信明（東京文化財研究所）
 出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財課文化財専門監）
 乗岡 実（岡山市教育委員会文化財課文化財専門監）（以上、順不同、敬称略）

調査協力
 山鹿市教育委員会
 菊池市教育委員会
 山鹿市菊池町米原区
 菊池市木野堀切区

2) 報告書作成（平成20年度）

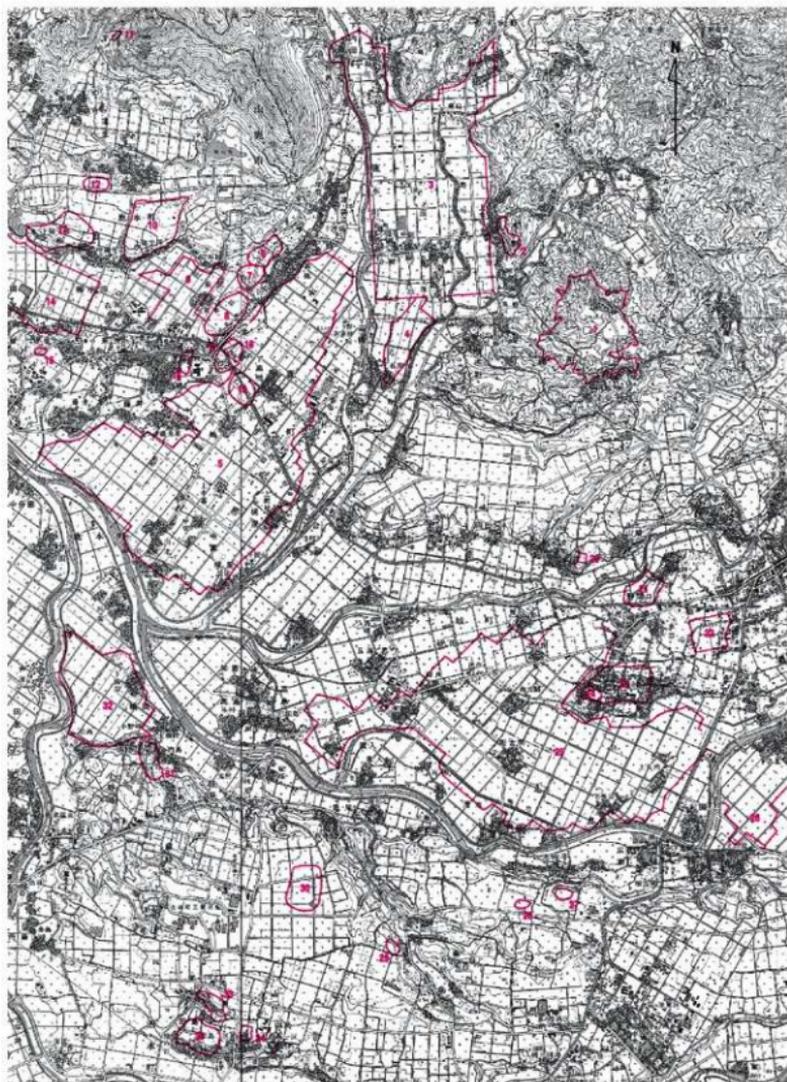
責任者 大田 幸博（熊本県立装飾古墳館長）
 総括 木崎 康弘（同 副館長 兼歴史公園鞠智城・温故創生館長）
 事務 鳥浦 拓夫（同 文化財整備交流課長）
 小佐井栄一（同 参事）
 担当 長尾 至明（同 文化財保護主事、主査）
 矢野 裕介（同 主任学芸員）
 大村ひかり（同 囑託）
 前川真由美（同 囑託）

第2節 位置と地形

1 遺跡の位置

熊本県の北部、阿蘇外輪山麓から有明海へと西流する一級河川「菊池川」、その河口より約30km上流の右岸に鞠智城跡は位置する。菊池川の支流迫間川、内田川に挟まれた標高70～80mの台（うてな）台地の基部、通称「米原（よなばる）台地」に立地する。周囲は、多くの小河川が入り込み複雑な地形を形成するが、中でも、鞠智城跡が立地する米原台地は、木野川の支流初田川流域の小盆地及びその小支谷に面しており、周辺の地形から独立した様相を呈している。標高145mと微高地ながらも、周辺の眺望は良好で、南には、菊池川の沖積作用により形成された肥沃な菊池・鹿本平野から標高70～100mの洪積段丘、通称「花房（はなぶさ）台地」が拡がり、北には八方ヶ岳（標高1,051m）を主峰とする、1,000m級の山々から成る筑肥山地が福岡県と大分県との県境を限る。

鞠智城跡周辺には、埋蔵文化財包蔵地も含め古代の遺跡が多く所在する（第1図）。中でも、官衙あるいはその関連施設と考えられている遺跡として、南の台地地の南西端に所在するうてな遺跡（8c後半～9c前半）や西方の御宇田丘陵上にある御宇田遺跡群（8c～9c）、菊池川の左岸、花房台地上にある上鶴頭遺跡



1. 鞠智城跡 2. 鷹(興)掛松 3. 鹿本平野赤屋跡 4. 内田川流域赤屋跡 5. 内田川流域赤屋跡 6. 内田川
 7. 湯神神社 8. 坂本 9. 赤屋跡 10. 御宇田成行 11. 丸通寺 12. 湯釜 13. 西久保 14. 赤屋跡
 15. 鬼丸 16. 前田 17. 善組工 18. 内田川流域赤屋跡 19. 越塚 20. 十津寺跡 21. 神楽 22. 赤屋跡
 23. 西寺 24. 西寺郡家及び土籠跡 25. 赤屋跡 26. 赤屋跡 27. 東山ノ上 28. 西原B
 29. 油屋長者屋敷跡 30. 上鶴岡 31. 西園神社橋 32. 橋田赤屋遺構 33. 南B 34. 田島興寺跡 35. 南A

0 2.5km

第1図 鞠智城跡周辺地形図

(9c 前半)がある。また、台地の南縁に、法起寺式の伽藍を持つ菊池郡家の郡寺に比定される十連寺廃寺(8c～9c)、さらに平野部に下った菊池川の左岸に、周囲を土塁で区画した菊池郡家に比定される西寺遺跡(8c末～9c初頭)など、鞠智城との関連で注意すべき遺跡が存在する。また、西の菊鹿(きくろく)盆地には、古代における土地区画である奈良跡が推定されている。

2 遺跡の地形

鞠智城跡は、城の中核部となる米原の台地を中心に、台地北の北に向かって開口する谷と台地南の北西に向かって開口する谷と、2つの谷を取り込んだ包台式の山城である。東を台地の東縁、西を灰塚、涼みヶ御所、佐官どんといった地名が残る、台地から北に向かって延びる標高150～170mの山尾根、南を堀切集落の後背にそびえる阿蘇溶結凝灰岩の崖線を南面とする、台地から北西に向かって延びる標高120～130mの山尾根で区画した、周長3.5km、面積55haの範囲が城域となる。最も低い地点は、台地南の谷の最も狭まる標高90mの「池の尾」で、外郭線上にある。

この範囲を真の城域としているが、城域については、古くから議論されており、周辺の地形から類推して、大きく狭域説と広域説とがあった。狭域説は、南の阿蘇溶結凝灰岩の崖線と、西を初田川流域の小盆地、北から東にかけては支流米原川の浸食谷で区切る、真の城域を内包する東西幅約1.6km、南北幅約1.3kmの範囲にわたる。南西隅の城内を流れる堀井川と初田川との合流地点に「大門」という地名が残ることから有力視された。現在のところ、その周縁部に遺構等の痕跡が確認されていないため、自然地形をそのまま防御ラインとしたとする見方が強く、真の城域を「内城地区」、それ以外を「外縁地区」と呼称している。

一方、広域説は、「大門」から初田川を渡り、対岸の頭合、木野、立徳と北に延びる低山の尾根をつたい、北から東へは全頭の連山(最高標高211.8m)をつたう馬蹄形を呈するラインとなる。最大直径3.6km、周長12kmとあまりに広大で、これも自然地形をそのまま利用したとする見方が一般的である。

第3節 調査の方法と経過

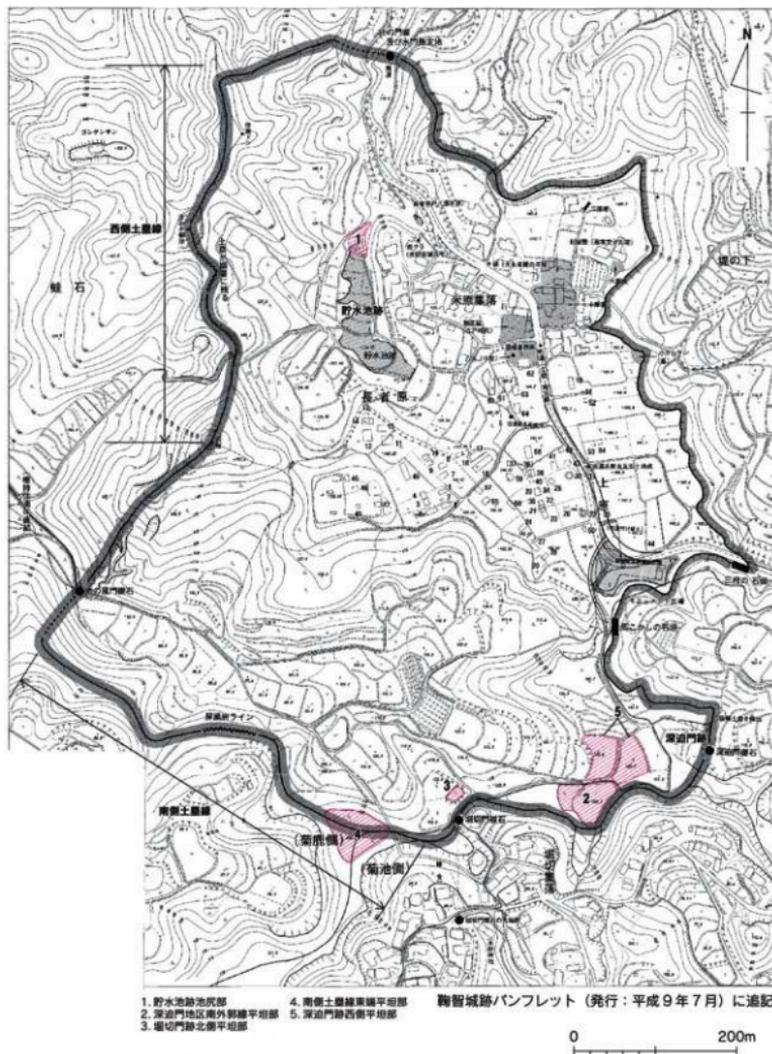
1 調査の方法

今回の調査は、これまでの調査成果等から遺構の存在が想定された貯水池跡池尻部、深迫門地区南外郭線平坦部、堀切門跡北側平坦部の3調査区については本調査として、今後広場整備を予定する南側土塁線東端平坦部、深迫門跡西側平坦部の2調査区については遺構の有無を確認するための事前確認調査として実施することとした(第2図)。以下に、各調査区における調査の目的及びその方法について述べる。

1) 貯水池跡池尻部

貯水池跡は、城域の中心部となる長者原地区の北側の谷部に位置する。南西から北に向かって延びる谷地形に沿って南北に長い形状となり、その北端の池尻部に設定した調査区(山鹿市菊鹿町米原字屋敷636、637番)である。調査区西脇には用水路(平成11年度に付け替え工事を実施)が北流し、調査区内には、中程に南西から北東に延びる比高差約1.3mの段差が存在した。

平成9年度に実施した第19次調査において、水成粘土層の拡がりから5,300㎡の広さの池を推定したが、当時、設定した39本のトレンチのうち、水成粘土層の北端部を把握した20トレンチが一部に含まれる。両脇から延びる支尾根により谷が最も狭まることから、発見当初から池尻部となる堰堤等の遺構が想定されていた。その後の調査で、途中小規模な堰堤を設けて水量を調整していたことが想定されたため、当初考えていた大規模なもの不要となったが、約240m先の谷筋の谷が狭まる箇所(北の門礎及び水門推定地)が想定されているため、大量の流水により決壊しないように少なくとも池の水量を調整する最終ラインとし



第2図 鞠智城跡全体図

ての機能があるものと考えられた。このことから、池の範囲を明確にすることと堰堤等の構造物の把握を主目的とし、本調査を実施することとした。調査にあたっては、当初、長さ約30m、幅約13mの規模のトレンチ（貯水池跡41トレンチ）を設定した。

調査は、まず、重機により地表面から50cm程を掘削した。段地形の南上段部において黄褐色土が認められ、遺構の可能性が考えられたため人力による掘削・運搬を実施することとした。掘削にあたっては、遺構であるかどうかの判断に苦慮する場面が多く、層序を確認するための計13本の小トレンチを設定して掘削を実施した。また、平成11年度の付け替え前の北側水路部分に多数の石・礫が散在していたため、遺構の手掛かりを探るべく清掃を行い、石・礫の露出作業を実施した。

調査に係る記録については、掘削に時間を費やしたため十分な時間を要することができなかった。このため、小トレンチのうち2本のみ1/20縮尺の土層図を手作業で作成し、1/100縮尺の遺跡地形測量図及び1/20縮尺の遺構図の作成を委託したほか、残りは写真で補い、次年度に実施することとした。出土遺物については、一部を光波測距機により出土地点を記録して取り上げを行った。また、写真撮影については、各カットにつきリバーサル、白黒フィルムの双方で撮影、地上からの撮影では困難なアングルについては、大型ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を委託した。

2) 深迫門地区南外郭線平坦部

地域の南東側に所在する深迫門跡の西側一帯には、比較的広い平坦地が複数存在する。そのうち南外郭線に隣接する、東西に連なる2つの平坦地に設定した調査区（菊池市木野字大堀切1775-1番）である。北側の市道米原～池野線から2.0～3.0m以上の高低差があり、過去に瓦片が採取されていることから建物遺構の存在が想定され、遺構の構造等を把握するため本調査を実施することとした。調査区内は、比高差2.0mの上下2段の平坦地となるため、東側の上段（深迫門地区Ⅲ区）に13m×10mのトレンチを、西側の下段（深迫門地区Ⅳ区）に16m×8mのトレンチをそれぞれ設定した。なお、トレンチについては、南側が急傾斜地となり、直下に民家が所在することを考慮して、できるだけ線から離れた平坦地北寄りに設定した。

調査は、重機による表土剥ぎ後、人力による掘削を実施した。Ⅲ区においては地山が盛土かの判断に苦慮したため、南・西・北壁にそって幅60cm程度の小トレンチを設定して層序を確認しながら掘り下げを実施した。また、地山が確認できたトレンチ南東隅付近から1.5m幅のトレンチを南に向かって20.0m延長し層序の確認を行った。一方、Ⅳ区においては、表土剥ぎの段階ですでに地山面が露出したため、遺構検出作業を主に実施した。トレンチ南西隅からさらに1.5m幅のトレンチを南に向かって8.0m、西に向かって14.0m延長して遺構の検出作業を実施した。

調査に係る図化作業については、光波測距機により計測した数値を測点とする1/100縮尺の平面図及び手作業による1/20縮尺の土層図を作成し、出土遺物については、一括して取り上げを行った。また、貯水池跡池尻部と同じ内容で写真撮影を実施した。

3) 堀切門跡北側平坦部

堀切門跡の北側上段部の平坦地に設定した調査区（山鹿市菊鹿町木野字堂の下1974番）である。周囲の平坦地は昭和40年代に造成されたとの話であったが、当該箇所のみ残丘状に残された地形を有していることから、建物遺構が存在する可能性が極めて高かったため、本調査として調査を実施することとなった。結果的に、他の調査区における発掘調査の進捗状況から実施できず、次年度以降に見送ることとした。

4) 南側土塁線東端平坦部

南側土塁線は南外郭線の西側半分に位置し、低山の尾根上、土塁的景観を色濃く残す約500mの区間をいう。各所に外側に突出する部分（一部平坦地）があり、そのうち最も東に位置する平坦地に設定した調査区（山鹿市菊鹿町木野字堂の下1982、1984番）である。平成13年度に実施した第23次調査において、土塁線に点

在する平坦部にそれぞれA～Iの地点名を付したが、当該調査区はA地点となる。A地点においては、第23次調査時にその西縁近くに2本のトレンチを設定して調査を実施したが、遺構等は検出できず、表土直下に黄褐色粘質土層の地山を確認したことから、当該平坦地は後世に造成されたものと結論づけていた。

今回の調査では、当該平坦地の南縁における版築土塁の有無の確認を目的に、平坦地中程の比高差1.0mの段差から南縁にかけて幅1.5m、長さ35.0mの規模でトレンチを設定した。

調査における土砂の掘削については、重機を入れることができなかったため、すべて人力によった。地山がどうかの判断に苦慮したためトレンチ東縁に幅60cmの小トレンチを設定して層序を確認したところ、版築による盛土層が確認できた。調査に係る図化作業については、1/100縮尺の平面図と1/20縮尺の土層図を作成し、出土遺物については、一括して取り上げを行った。また、他の調査区と同じ内容で写真撮影を実施した。

5) 深迫門跡西側平坦部

深迫門跡の西側一帯は、西に向かって開口する谷部の谷頭に当たる部分で、谷地形に沿い帯状の平坦地が連なる。そのうち、市道米原～池野線を挟んだ両側に高低差1.3mの上下2段の平坦地に設定した調査区（山鹿市菊鹿町木野字堂の下1914番・菊池市木野字深迫1901番）である。下段の西側平坦地を深迫門地区Ⅰ区、上段の東側平坦地をⅡ区として確認調査を実施した。地形及び掘削状況に応じて、Ⅰ区に3本のトレンチ、Ⅱ区に4本のトレンチを設定した。

調査における土砂の掘削についてはすべて重機により、図化作業に伴う清掃作業のみ人力により行った。調査に係る図化作業については、1/100縮尺のトレンチ配置及び平面図と1/20縮尺の土層図を作成し、出土遺物は一括して取り上げた。また、他の調査区と同じ内容で写真撮影を実施した。

2 調査の経過

第29次調査は、平成19年6月27日から平成20年3月28日までの期間で実施した。その経過は以下のとおりとなる。

【6月】27日：<貯水池跡>調査予定地区の周辺状況写真を撮影。28日より重機による表土剥ぎを実施。天気は雨が多い。

【7月】3日：<貯水池跡>表土剥ぎ終了。41トレンチとした。この段階でトレンチ南側に堰堤らしき高まりを確認。層序確認のために①トレンチを設定。5日より作業員を入れた作業開始。雨水と湧水の処理等環境整備を行う。17日より清掃に入る。第19次（平成9年度）で設定した20トレンチの確認作業を行うが、把握が困難。南側の高まりと①トレンチの断面より、高まりは土塁と推測する。41トレンチ壁面での土層確認作業を開始。41トレンチ全体の平面精査により、南側溝と北側溝を検出。高まり北側に②トレンチを設定。19日：第19次20トレンチ埋土掘削と②トレンチ掘り下げ。24日：②トレンチに礫を敷いたような部分と水平堆積した比較的しまる土を検出。26日：高まり上に土坑2基を確認。27日より③トレンチ周辺の精査を実施。【8月】1日：<貯水池跡>台風接近。7日より高まり及び、北側溝周辺の平面精査を実施。16日より南側溝・土坑・北側水路の掘削。24日：4級基準点・メッシュ杭設置。<深迫門地区Ⅰ・Ⅱ区>重機による表土剥ぎを実施し確認調査部分の清掃。

<貯水池跡>24日：南側溝は新しいものと判断。②トレンチ西側に小トレンチを設定。29日：土坑2基は攪乱と判断。

【9月】3日：<貯水池跡>第19次20トレンチ内に小トレンチを設定し青灰色土を掘り下げ地山を追う。7日：41トレンチ西側壁面において地山の確認をするために④トレンチを設定。41トレンチの北側部分に調査作業の重点を移す。⑤トレンチを設定し掘り下げ、約80cmの石が出る。その北側で地山を確認、地山上に水平堆積するしまる土を検出。

12日：＜南側土壘＞調査区周辺の竹を伐採し、トレンチを設定。13日より手堀りによる表土の掘削に入る。
20日：トレンチの城外側に灰白色土を確認。25日：灰白色土部分に小トレンチを設定し、版築土壘を確認。
今回の調査目的である南側土壘部分において遺構が存在することを確認した。

27日：＜深迫門地区Ⅲ・Ⅳ区＞表土剥ぎを実施。

【10月】3日より貯水池跡・南側土壘と深迫門地区の調査を並行して実施。

＜南側土壘＞3日：一部地山を確認したため、その上面にある堆積土を小トレンチにより掘削する。城内側
の一段下がった部分の掘り下げを実施。＜深迫門地区Ⅲ・Ⅳ区＞3日：トレンチ清掃。5日より植木穴の確認
作業を実施。＜南側土壘＞18日：記録写真を撮り、シートで養生し、一応の区切り。23日：＜深迫門地区Ⅲ・
Ⅳ区＞植木穴等攪乱部分を掘削。24日：＜貯水池跡＞北側水路の清掃。31日：＜深迫門地区Ⅲ・Ⅳ区＞Ⅲ区
トレンチで地山確認。

【11月】7日：＜深迫門地区Ⅲ・Ⅳ区＞トレンチ西側の黒褐色土を除去し硬化した面等を確認。＜貯水池跡＞
①トレンチ近くの溝内掘削。21日より＜深迫門地区Ⅰ・Ⅱ区＞トレンチ精査。27日より＜貯水池跡＞北側溝
周辺の平面精査。

【12月】4日：＜貯水池跡＞第19次20トレンチの土層を確認するために掘り下げを実施。①・④・⑥トレ
ンチの土層断面の確認作業。6日：41トレンチ西壁に版築らしき部分を確認。7日：それに伴い④トレン
チを南側溝部分まで延長。13日：④トレンチの掘り下げの段階で青磁片が出土したため、その層以上は中世以
降の層と判断。そのため、南側の高まりは鞠智城の築城当時のものである可能性が低くなった。作業は、湧水
が多く、処理に労力を必要とするため、水成粘土のほぼ上面までの掘り下げとなる。19日：遺物を取り上げ、
41トレンチの写真記録等を行い調査終了させる。その後、貯水池跡の追加調査が決定。調査計画を協議する。

【1月】23日：＜貯水池跡＞追加調査を開始。25日：＜深迫門地区＞調査区の空中写真撮影実施。その後最
終的な掘り下げを実施。

【2月】5日より＜貯水池跡＞④トレンチにおいて、貯水池跡の東側の池のラインを確認するためトレンチの
延長を実施。また、⑤トレンチの水平堆積部分の断ち割り調査を実施。＜南側土壘＞土壘の明確な範囲や地山
との関係を把握するため、追加の掘り下げを実施。土壘部分は上面を平面的に露出。その際に、柱穴痕の可能
性がある遺構を検出。7日：＜貯水池跡＞⑤トレンチ掘り下げで青磁片が出土し、その層までは中世以降の堆
積と判断。13日：＜貯水池跡＞北側水路南壁部分に土壘が存在する可能性から地山への取り付けを確認す
るため⑥トレンチの掘り下げを実施。19日：＜貯水池跡＞⑥・⑧トレンチを設定。20日：＜貯水池跡＞⑧トレ
ンチの粘土層上面で多数の窪みを確認するが成因は不明。＜南側土壘＞実測及び写真記録を行い、南側土壘の
調査を終了させる。22日：＜貯水池跡＞①・②トレンチの掘り下げを実施。29日：朽津信明氏を専門調査員
として招聘し指導を受ける。

【3月】5日：＜貯水池跡＞⑩トレンチを設定。①トレンチは砂層に部分的に水成粘土が確認でき、池底の確
認のため掘り下げを実施。水成粘土内から木枝を多く検出。6日：＜貯水池跡＞②トレンチ内の礫の上に粘土
を貼り付けたような層を確認。⑩トレンチを設定する。拳より小さい礫が平面的に広がり、その範囲確認を進
める。14日：専門調査員として西谷正氏を招聘し調査について指導を受ける。18日：専門調査員として小田
富士雄氏を招聘し指導を受ける。21日：本年度の第2回検討委員会において委員の方々の現地視察における
指導。22日：出宮徳尚氏、兼岡実氏を専門調査員として招聘し指導を受ける。24日：亀田修一氏を専門調査
員として招聘し指導を受ける。25日：貯水池跡の空中写真撮影実施。その後、遺構の実測、写真等の記録作
業をし、トレンチの養生、調査用具の整理をして本年度の調査を終了。

【4月】17日：第29次調査の成果のうち、南側土壘線における版築土壘と貯水池跡池尻部における状況につ
いて、報道各社に対して記者発表を実施。

3 鞠智城跡出土の石器類〔第3図1～第4図13〕

平成19年度、第29次調査の貯水池跡41トレンチ、深迫門地区Ⅲ区トレンチから出土した石器類について主なものを取り上げて、報告したい。

これまでの鞠智城跡の調査では、先土器時代から縄文時代までの各種石器類が出土した。ただし、その時代認定については、それぞれの文化層からの抽出ではなく、先土器時代のナイフ形石器、縄文時代の石鏃や打製石斧など、それぞれの時代を特徴付ける石器の抽出が前提で行われてきた。従って、時代を特徴付ける石器以外の大多数の石器類では、まったく時代認定が行えないできた。この点については、今回の調査でも同じで、石器類は、すべて貯水池跡への流れ込んだものと判断できる。

石器には、扁平打製石斧、石匙もしくは石槍、磨石がある。この中、前2者は、縄文時代を特徴付ける石器である。1は、扁平打製石斧である。緑泥片岩製である。胴部下半から刃部までを欠損したもので、現存長で10.3cm、幅6.15cm、厚さ1.3cmである。大型の板状原形を素材にその縁辺からの加撃による調整によって形を整えている。縄文時代後期～晩期の石器である。2は、石匙もしくは石槍である。サヌカイト製である。大型で厚手の横長剥片を素材に、その縁辺を中心に二次加工が施されている。縄文時代の時期を特定することはできない。

二次加工ある不定形石器、使用痕ある剥片という不定形石器がある。表面の風化の状況から判断するに、先土器時代に遡るものは見当たらない。つまり、縄文時代の石器であろう。二次加工ある不定形石器は、6である。安山岩製である。表面に自然面を残す横長剥片を素材に、剥片の左側縁の裏面に「裏面側→表面側」の順で二次加工が施されている。使用痕ある剥片は、3～5、7、8である。3は、黒曜石製である。自然面を打面にした、幅広の剥片である。長さ2.6cm、幅1.75cm、厚さ0.6cm。使用痕は、剥片の右側縁で観察される。4は、黒曜石製である。自然面を打面にした、幅広の剥片である。長さ2.2cm、幅2.1cm、厚さ0.65cm。使用痕は、剥片の右側縁で観察される。5は、姫島産の黒曜石である。自然面を打面にした横長剥片で、表面も自然面である。長さ3.18cm、幅4.5cm、厚さ1.2cm。使用痕は、剥片の右側縁から先端部にわたって観察される。7は、腰岳産の黒曜石である。半剥離打面の縦長剥片である。長さ2.5cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm。使用痕は、剥片の先端縁で観察される。8は、腰岳産の黒曜石である。自然面を打面にした縦長剥片で、表面にも広く自然面を残している。長さ3.1cm、幅2.75cm、厚さ1.1cm。使用痕は、左側縁で観察される。

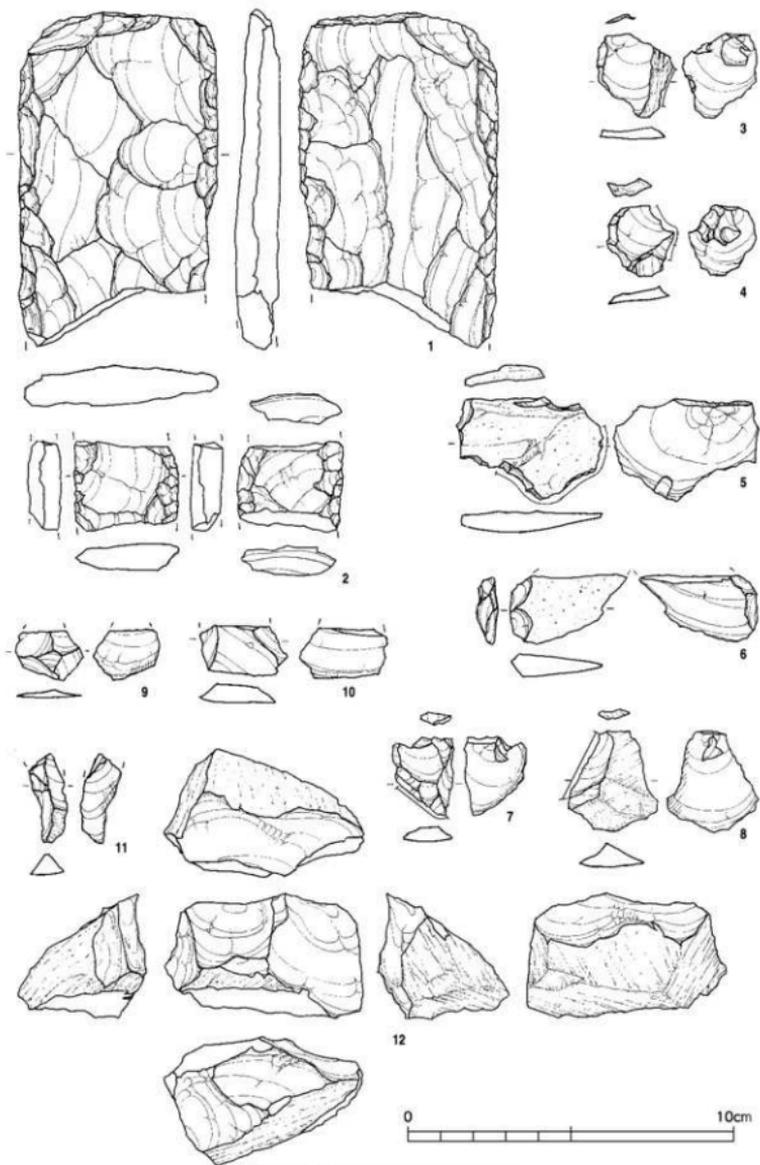
9～11は、砕片である。9は、黒曜石製である。10は、安山岩製である。11は、腰岳産の黒曜石である。

12は、石核である。サヌカイト製で、表面の観察によれば、幅広から横広の剥片が剥ぎ出されている。長さ3.8cm、幅6.2cm、厚さ4.0cm。

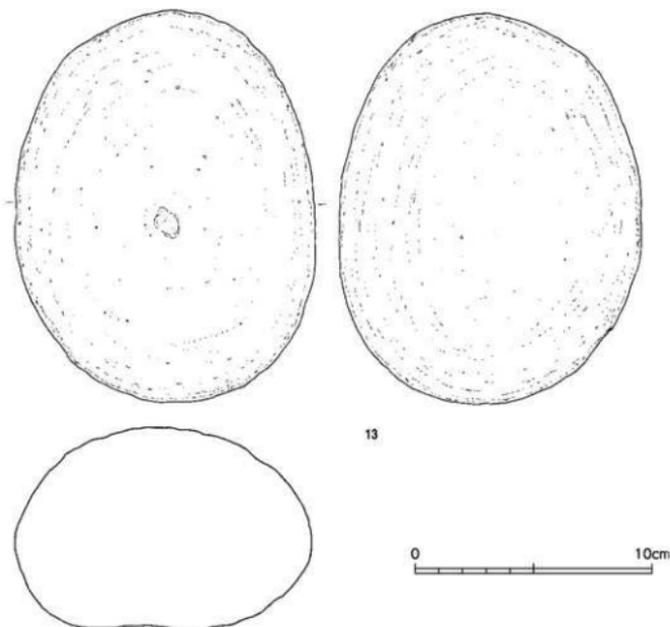
13は、深迫門地区Ⅲ区トレンチで採集された磨石である。安山岩製の円盤を素材に使用されている。長さ16.7cm、幅12.4cm、厚さ8.6cm。表面で敲打痕を観察することができず、主に磨石での使用であったことが分かる。

第4節 これまでの成果

昭和42年度の第1次調査に始まる鞠智城跡の発掘調査は、昨年度で29次を数える。この間、八角形建物跡をはじめとする72棟分の建物遺構（内訳；掘立柱建物50棟、礎石建物22棟）や平成9年度に発見された5,300㎡の規模をもつ貯水池跡、深迫・堀切・池の尾と計3箇所に門礎石を伴う城門跡及び池の尾の水門、南側及び西側に所在する土塁線など、徐々にではあるが、次第に明らかとなっている。このうち、第29次調査においては、南側土塁線及び貯水池跡において大きな成果が上がった。こうしたことから、ここでは、土塁線と貯水池跡におけるこれまでの成果の概要を述べる。



第3図 鞠智城跡出土の石器類①



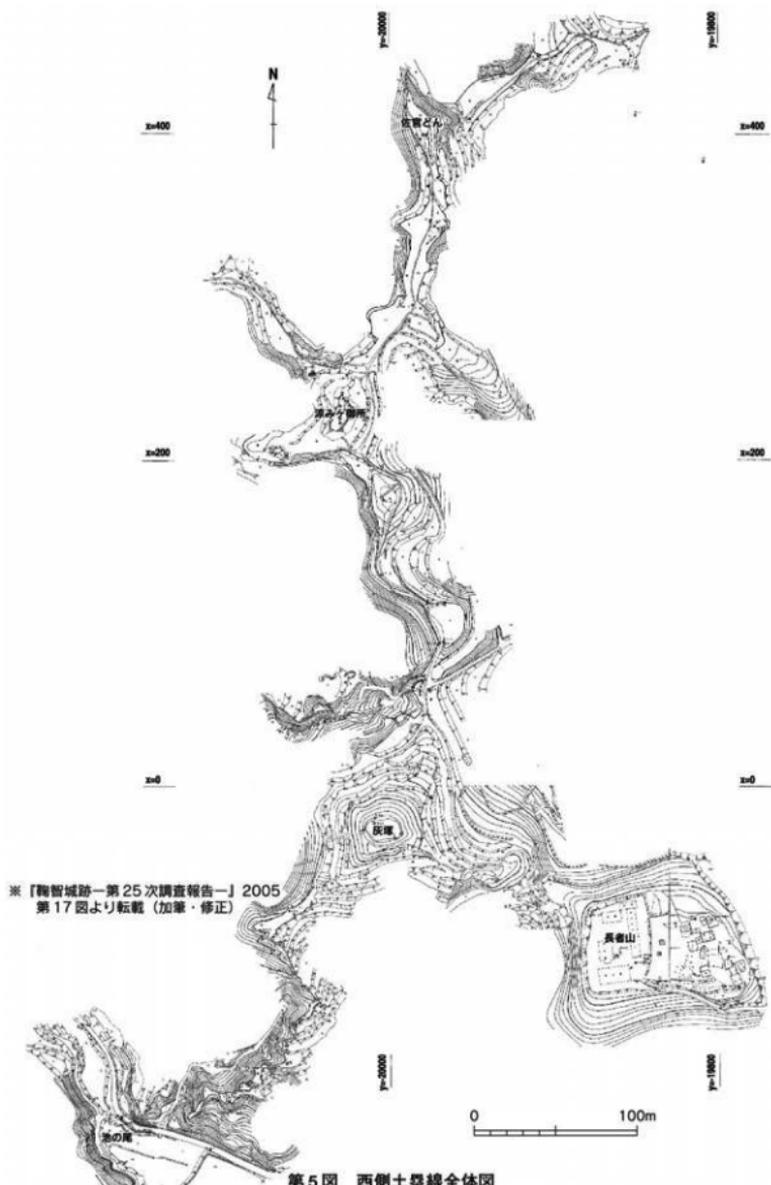
第4図 鞠智城跡出土の石器類②

1 土塁線の調査

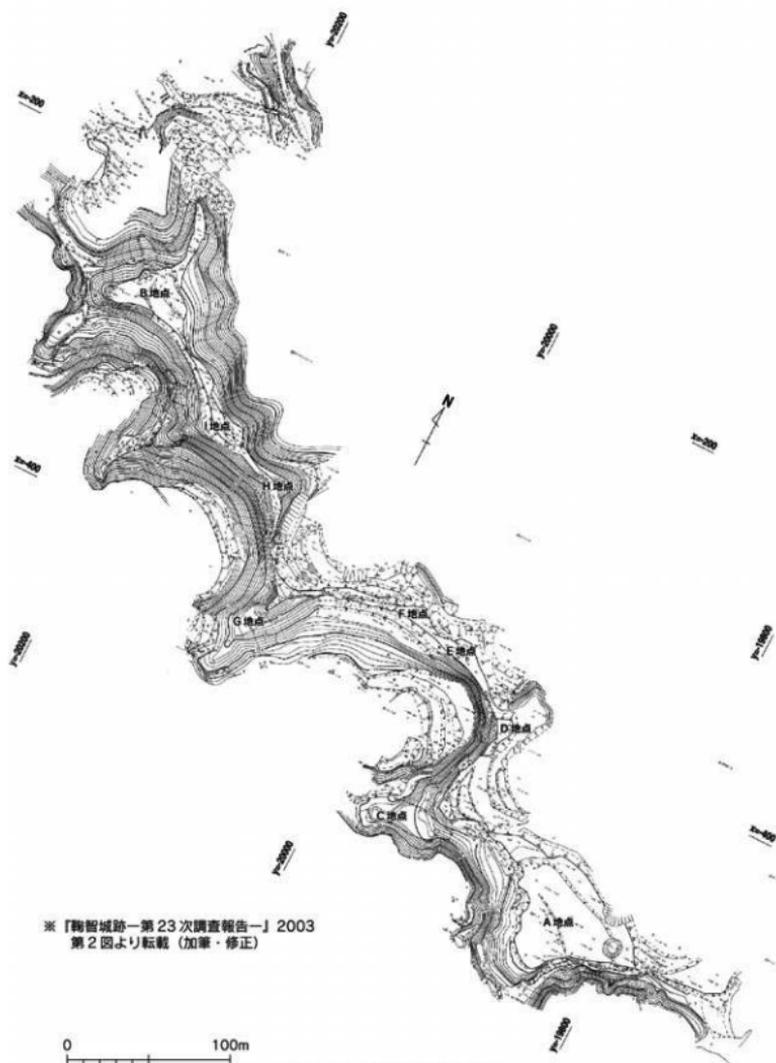
鞠智城跡の外郭線には、土塁的景観を色濃く残す西側土塁線と南側土塁線とがある。西側土塁線は台地北西縁から北方向に派生する標高150～170mの低山の尾根上に位置し、「灰塚」、「涼みヶ御所」、「佐官どん」といった地名が残る〔第5図〕。また、南側土塁線は台地の南東隅から北西方向に派生する標高120～130mの低山の尾根上に位置し、堀切門跡より以西の約500mの区間を指す〔第6図〕。土塁線の調査（門跡の調査を除く）については、これまでに、第1次調査（昭和42年度）、第3次調査（昭和44年度）、第14次調査（平成4年度）、第23次調査（平成13年度）、第25次調査（平成15年度）と、計5回実施されている。以下に、各調査次における土塁に関する成果について述べる。

1) 第1・3次調査（昭和42・44年度）

西側土塁線北端の佐官どん地区において露出した11個の石群の把握を目的とする調査が実施された。結果的に建築遺構に伴う礎石とした石群については原位置を保っていないことが判明したが、第3次調査において、その西側の高まり（城外側）で褐色土を縞状に盛土した土層が確認された。この盛土層については、土塁線先端近くの自然尾根が切れる平坦部のみのものであり、基本的には自然地形を利用し外面を急に、内側は車路を創り出すため削り落とし整形したものと結論付けられた。併せて実施した土塁の横断面測量に



第5図 西側土塁線全体図



第6図 南側土塁線全体図

おいても、「灰塚」から「佐宮どん」にかけての土塁線においては、地形観察と実測作業から、山尾根の内と外を断崖状に削り落し、尾根の頂部は平坦で断面梯形となるものと、外側を削り落し、内に犬走り状の車路を設けたものの、2種の土塁が推定された。

2) 第14次調査(平成4年度)

西側土塁線における、「灰塚」から「佐官どん」までの総延長545m分の図化作業(縮尺1/200)と土塁線各所におけるトレンチ調査が実施された。その結果、土塁線については、調査箇所に限っては版築状態にないことが判明したが、従来の地山の削り出しによる土塁であることに対しても確証を得られないまま調査を終えている。また、西側土塁線の中程から外側に突出する「ゴンゲンサン」の痩せ馬状の尾根筋と、長者山から灰塚にかけての尾根筋をどう捉えるかなど、新たな問題提起が為された。

その後、平成6年度の第16次調査として実施した深迫門跡の調査で、通路両脇に谷部を狭めるための版築土塁が明確に検出されたが、城門周辺という部分的な構造物として捉えられ、土塁線においては従来の削り出しの土塁との見方は強まる一方であった。

3) 第23次調査(平成13年度)

南側土塁線の土塁構造の解明を目的とした調査が実施された。土塁線の西端部B地点の南西隅に土塁状の高まりが認められ、土塁の存在が有力視された。土塁線に直交する形で外斜面上にトレンチを設定して断ち割り調査を実施したところ、約70mの区間にわたって版築状の盛土が検出された。各トレンチにおける検出状況に差異が認められたが、それぞれの自然地形の特徴に応じた構築方法を柔軟に採用した結果によるものとし、特に、南面する土塁については、中位に楕状の平坦面を持つ点で共通し、削り落としによって勾配をきつくするといった防衛面での工夫が認められるとの見解を提示している。

4) 第25次調査(平成15年度)

西側土塁線の北端「佐官どん」周辺の土塁構造の解明を目的とした調査が実施された。その結果、約50mの区間にわたって版築土塁を検出した。高さ3.0m程度の土塁が推定され、鉤状に地山を削り出し、その上に盛土する内托式で裾部に石列を配する構造が認められ、土塁頂部と裾部に柱穴列を確認したことにより具体的な築造工法が明らかとなった。また、土塁背面の石列や溝が検出され、雨水対策のものも推定された。

2 貯水池跡の調査

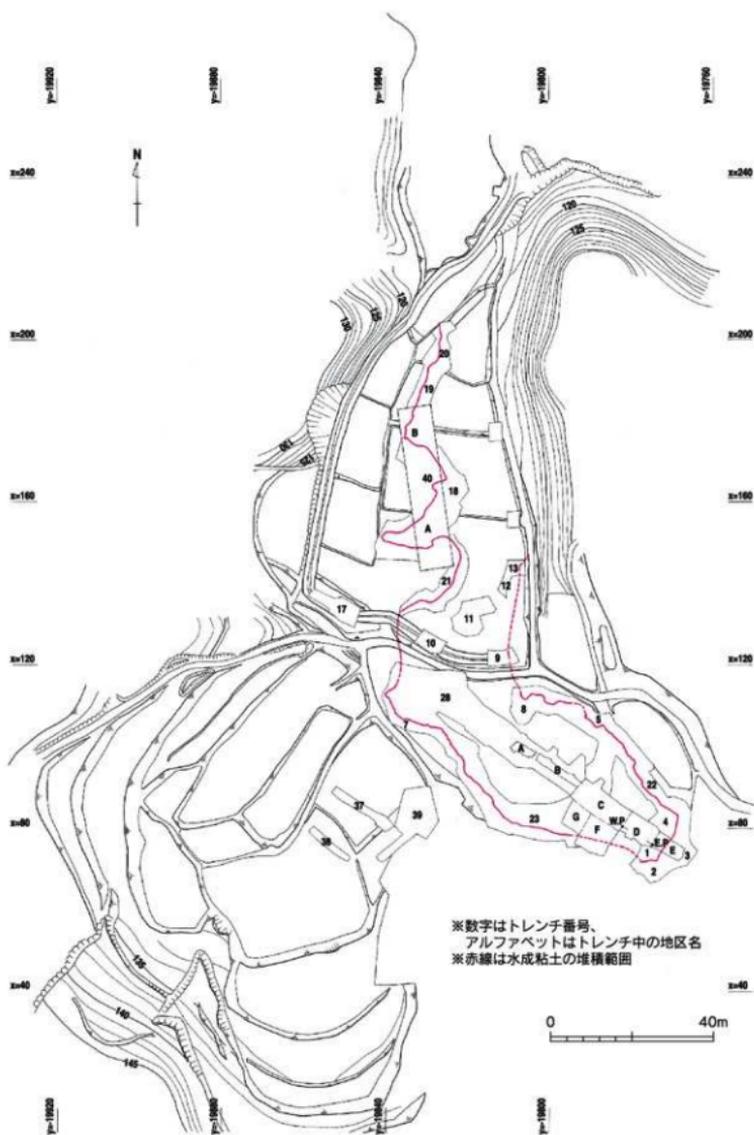
貯水池跡は、長者原地区の遺構保存を目的とする盛土造成工事に伴い、その調整池を予定した谷部の事前確認調査により発見された遺構である。約5,300㎡の広さを有する池跡で、平成9年度の見発見当初から発掘調査を継続し、これまでに、取水口、石敷遺構、貯木場跡、木組遺構(水汲み場跡)、堤防状遺構(小堰堤)、柱穴列等の遺構を検出してきた(第7図)。以下に、これまでの成果の概要について調査次ごとに述べる。

1) 第19次調査(平成9年度)

長者原地区の盛土造成工事に伴い、その北側谷部に調整池を造ることになったことから、遺構の有無を確認する事前確認調査が実施された。その結果、遺物を包含する青灰色粘土層の存在が把握され、その成因を調べた結果、水成粘土層であることが判明し、池跡の存在が明らかとなった。5,300㎡の面積が把握され、その造成にあたっては、谷地形をうまく利用し、一部人工的に造成を加えているものと推定した。また、池跡中程の西側斜面(7トレンチ)において取水口が確認され、「秦人忍^〇五斗^〇」銘の木簡も出土した。

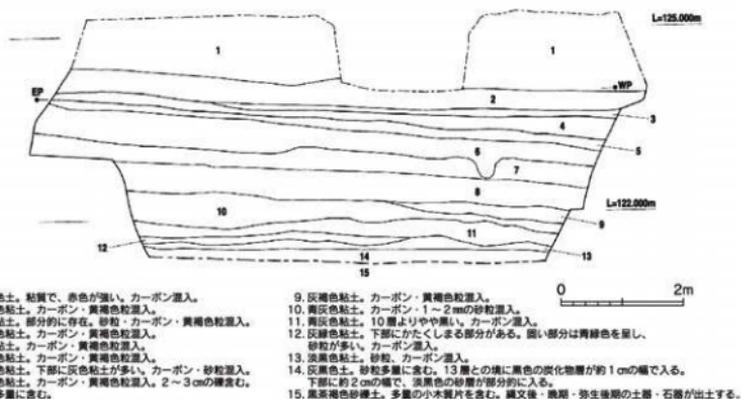
2) 第20次調査(平成10年度)

第19次調査で設定した28トレンチをA、B、C、D地区に分けて、池の構造を確認するための調査が実施された。その結果、A地区では大型の建築材、B地区では木舞と考えられる細材の出土が顕著で、出土地点が池の中央部、水位の最も深いところであったことから、貯木を目的としていると結論づけた。また、取水口付近の調査において、掘り込み前面に立杭3本を検出し、さらに6~7m先に取水口からの水勢を弱めることを目的とする幅約3~4m、高さ約20~30cmの地山の高まりと上面に礫を敷いた石敷遺構を検出した。



※数字はトレンチ番号、
 アルファベットはトレンチ中の地区名
 ※赤線は水成粘土の堆積範囲

第7図 貯水池跡全体図



第8図 28トレンチD地区南壁土層図

3) 第21次調査（平成11年度）

第20次の継続調査として、28トレンチC・D地区と新たに設定したE・F地区の調査が実施された。その結果、E、F地区において欄を伴う池の端部が把握された。また、D地区南壁において基本土層を再確認した。

4) 第22次調査（平成12年度）

第21次のC地区で一部把握された木材の検出を目的に、F地区の調査が実施された。その結果、一部加工痕が確認できる5本の木材をやや台形に組んだ最大幅約282cmの本組遺構（水汲み場跡）を検出した。さらに、北側のC地区東壁断面において幅386cm、高さ73cmの台形様の堤防状遺構が把握され、削り出した地山に粗朶を敷き、粘質土と砂質土を交互に盛土する構造を確認した。当該遺構の検出により、池の途中で水位を調整していたことが明らかとなった。また、貯木場と水汲み場の間にあることから、池の利用用途を異にする小区画でもあったと推定した。

5) 第23次調査（平成13年度）

第22次の継続調査として、G地区を新たに設定して28トレンチC地区東壁断面上で検出された堤防状遺構の平面的な検出を目的とする調査が実施された。その結果、池岸に向かって撥状にひらく形状を確認した。また、37・38・39トレンチの再調査で、67号礎石建物跡と68号掘立柱建物跡の構造確認を実施した。

6) 第24次調査（平成14年度）

貯水池跡中程より北側に40トレンチを設定してその南半分（A地区）の構造把握を目的とする調査が実施された。その結果、南側の池岸張り出し部が盛土により造成されていたことが判明し、遺物の混入から創建当初からある一定期間を経て構築されたものと結論づけた。また、丹塗土器3点の出土により祭祀関連の施設の存在を想定した。

7) 第25次調査（平成15年度）

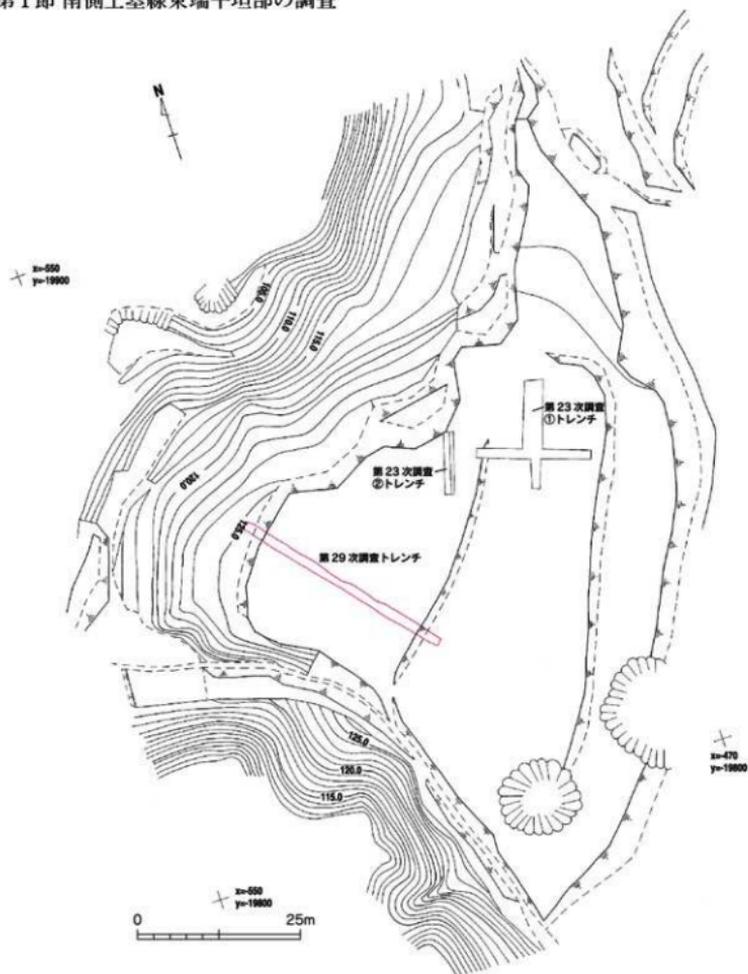
第24次に続き40トレンチ北半分（B地区）の調査を実施したが、調査途中で中断した。

8) 第26次調査（平成16年度）

貯水池跡の北端、池尻部に当たる厩屋推定箇所周辺の地形測量等の図化作業を実施した。現地観察の結果、水路内に確認できた多数の転石から、石積みの構造物を推定した。

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 南側土塁線東端平坦部の調査



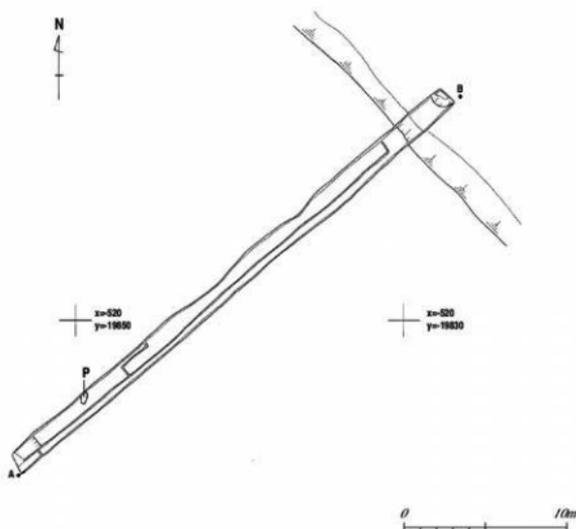
第9図 南側土塁線東端平坦部全体図

1 トレンチの設定

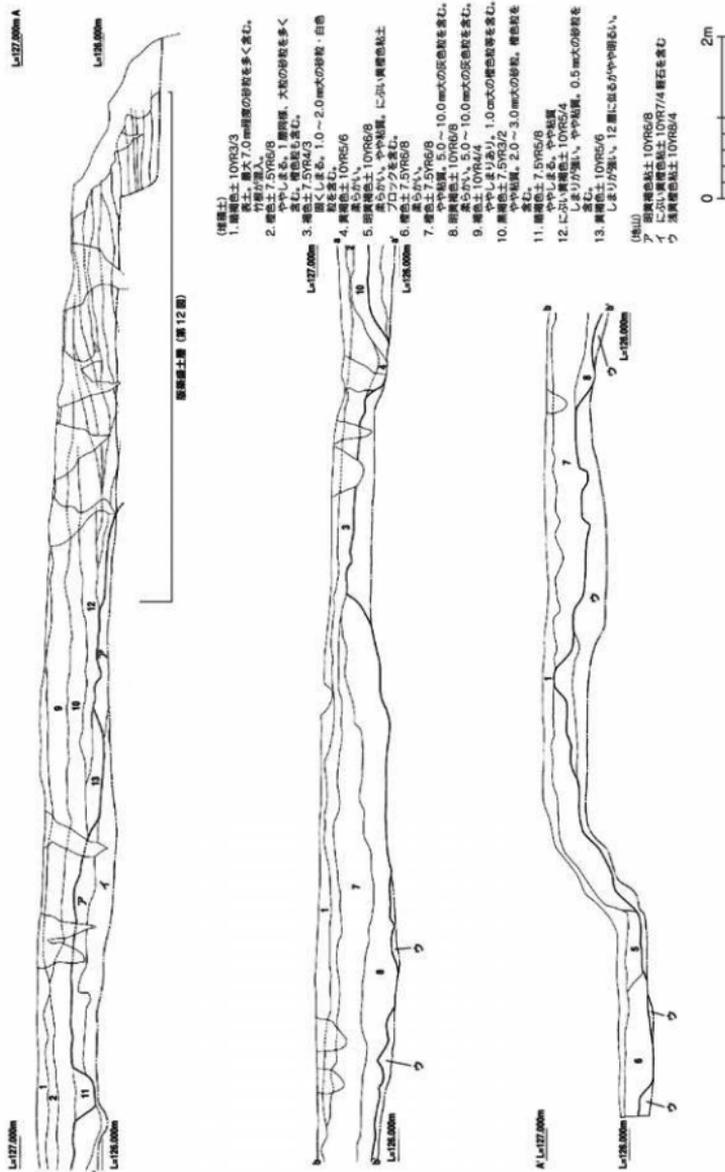
南側土塁線東端部は、南方向に伸びる支尾根の基部にあたり、標高128m程の比較的広い台形様の平坦地である。中程に高低差1.0mの段差を有する上下2段の平坦面を構成する。前章で述べたとおり、平成13年度に実施した第23次調査において、A地点と付し、その西端近くの調査を実施したが、表土（黒色腐食土）直下に自然堆積層となる黄褐色粘質土が削平された状態で検出されたことから、調査箇所に限って後世に開削された平坦地と結論付けた。当時、その東側一帯には竹が繁茂して地形的な検証ができなかったが、その後の竹の伐採により東側一帯にも連続する平坦地が広がることが明らかとなった。このように、一帯は後世に開削された可能性が高まり、遺構が存在する可能性が極めて低かったことから、南側土塁線の拠点広場としての整備が計画され、平成19年度に実施することとなった。ただし、上段の平坦面縁に土塁が残存する可能性があったため、トレンチによる事前確認調査を実施することとなった。トレンチについては、土塁の把握を目的に、平坦部中央付近に、長さ35.0m、幅1.5mのトレンチを上段の平坦面縁から下段裾部にかけて設定した。〔第9図〕

2 遺構について

当初、表土（暗褐色土）直下のしまりのある褐色土について、自然堆積層かどうかの判断に苦慮し時間を要したが、土層確認のためトレンチ東際に幅30cm程の小トレンチを設定して掘削した。その結果、トレンチ南端の平坦地南縁部において上端幅6.3m、高さ1.3mの範囲で版築盛土層を検出することができた。これにより、最大厚約1.0mで堆積する褐色系土（2～9層）は後世の堆積土であることが明らかとなった。また、



第10図 南側土塁線東端平坦部トレンチ平面図



第11図 南側土壁線東端平坦部トレンチ土層断面図



第12図 版築盛土土層図

版築盛土の北側上層でみられる層厚10～26cmの黒褐色土層（10層）については、やや粘質でしまりのある層であったが、褐色系土が堆積する前の旧地表土であると結論づけた。この黒褐色土層については、トレンチ南端より15.3m北の上端幅1.12m、下端幅0.54m程の地山掘り込み箇所までの堆積が認められた。それより北側は、何らかの理由で削平されたものと考えられた。平坦部中程の0.7～0.8m程度の段差も一連の造成である可能性が高く、また、トレンチ北端部で認められる深さ1.6m以上の穴についても同様の造成と考えられる。〔第10・11図〕

版築土塁は、地山に依拠した内托構造が想定され、土塁背面の地山面より約0.32m高まることから、上部を火築式に盛土した構造となる。基本的に粘質土と砂質土の互層堆積となるが、土のしまり具合及び堆積状況から、大きく3段階に区分することができる〔第12図〕。上端から0.5mまで（a～g）は、褐色系土で構成され、層が厚くしまりが比較的弱く、城内側に向かって下降するように盛土されている状況が認められる（A）。その下層は、固くしまる細層（h～n）で構成される。当該調査で確認できた南端部においては、ほぼ水平に堆積し、灰白色砂質土を含め軽石を多く含むのを特徴としている（B）。また、土塁背面側、地山と接する部分には、上のAと堆積を異にする3層（o～q）が確認できた。比較的しまりが弱く、土塁前面に向かって下降する堆積状況を示す（C）。Bとのつながりまでは確認できなかったが、つながる可能性は否定できない。このうち、特にBについては、当該地点の基盤面となる阿蘇塔結凝灰岩の土壌化したものを盛土材として使用しており、これまでの土塁調査の中で、今回初めて確認された土層となる。

また、トレンチ南端より5.5m南の盛土内に柱穴らしきプランを確認した〔第10図P〕。0.7m×0.35mの楕円形で、埋土は柔らかい粘質土となる。樹根の可能性もあるが、位置的には、版築工法における支柱の控え柱の位置となる。このほか、盛土端より背面側1.25mの位置に、土塁背面の溝の可能性のある上端幅1.62m、下端幅0.95mの掘り込みを確認した。

3 出土遺物について

トレンチ内における遺物の出土はほとんど無く、数点認められた土器はいずれも細片で、時期を特定できるような状況ではなかった。

第2節 貯水池跡池尻部の調査

1 トレンチの設定

貯水池跡における調査は、前章で述べたとおり平成9年度に実施した第19次調査より継続している調査である。第29次調査では、第19次調査で設定した20トレンチより先の池尻部における池範囲の確定、堰堤等の構造説明、の2点を主たる目的とした。

調査箇所は、貯水池跡が続くと思われる南北に延びる谷部で、西側土塁線が所在する山尾根から分岐する支尾根と米原集落から北西側に突出する尾根により東西幅が最も狭くなる地点となる。また、その先には平成11年度に付け替え工事を実施して廃絶した幅約2.0mの旧水路が存在しており、その水路内の床面や壁面には1mを超す大石と20～50cm大の無数の石やそれ以下の小さな石が散在する。こうした周辺の地形と水路内の集石状況から、この地点に、貯水池の池尻部を想定し、堰堤等何らかの遺構が存在する可能性が高い、と以前より注目されていた。〔第13・14図〕

こうした状況を踏まえ、谷が最も狭まる箇所を中心に、南側を20トレンチに一部重ね、北側を旧水路（北側水路）までとする、長さ約20m、幅約15mの南北に長い41トレンチを設定して調査を実施することとした。

2 遺構について

表土剥ぎの段階で、41トレンチ南側に当初は堰堤と考えられた土段状の高まりを確認したことから、その構造説明を目的に調査を実施することとした。結果的に、その土段状の高まりについては構造把握まで至らず調査を終えたが、周辺部には土層確認のため計13本の小トレンチ（①～⑬トレンチ）を設定して調査を進めることとした。〔第15図〕

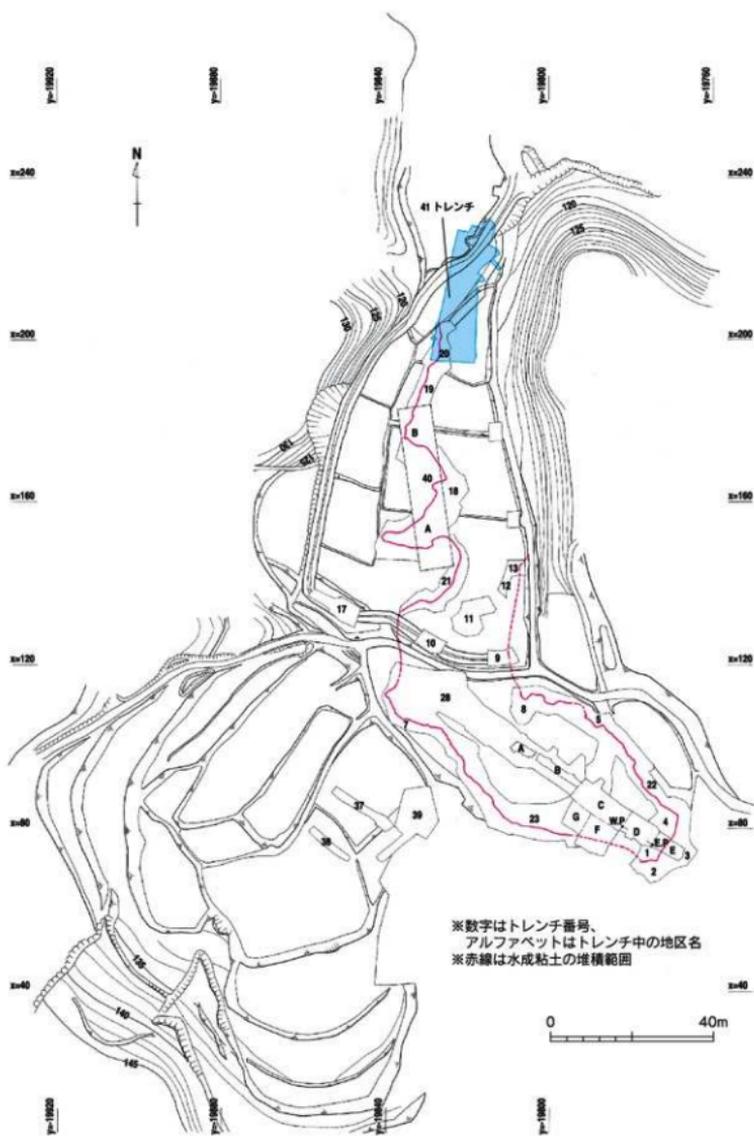
以下に、各トレンチにおける調査の成果を記述する。なお、土層図については、次年度も継続して調査を実施することとしたため、層序の把握が明確であった②、⑤トレンチのみ作成することとし、その他は、次年度に検討を加えることとした。

① トレンチ

表土剥ぎ直後に設定した1.0m×4.0mの小トレンチである。41トレンチ南側の土段状の高まりが、当初堰堤ではないかと捉えていたため、その土層把握のためその北東縁にほぼ南北方向に設定した。その後、北側の下段平坦部とのつながりを把握するため北方向へ約5.0m延長したが、調査期間中、降雨によりトレンチ壁面が若干崩落したため、トレンチ南側部分は後述する⑤トレンチとつなげて多少拡張することとなった。

土層の断面観察において、上部に黄褐色土を中心とする不整形な構造的盛土、その下にしまりのある青灰色の堆積層を確認し、当初これらの層を一括して盛土層と認識して掘削を進めたが、⑤トレンチ内において、上部の層と同一の層から青磁片が出土したため、中世以降の堆積であることが把握された。以降、南側部分においては⑤トレンチと連結して掘削を進めることとした。

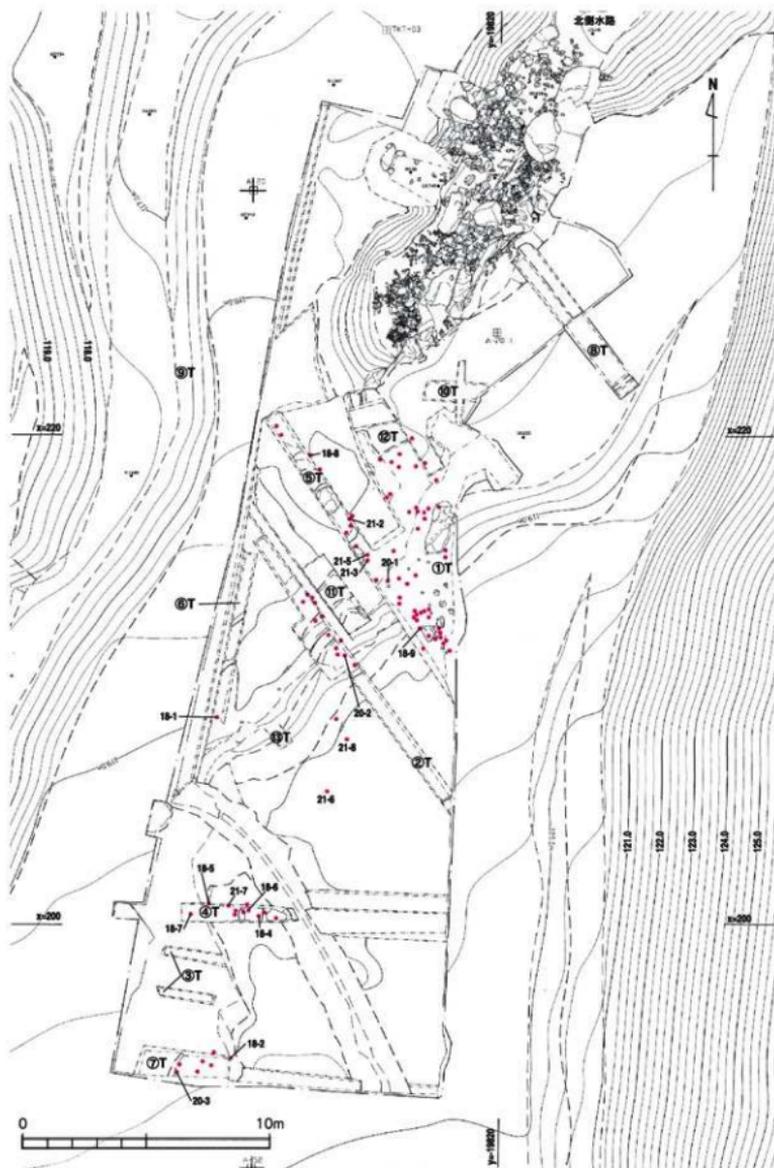
最終的に、貯水池の底を確認するため、さらに掘り下げを行ったところ、下部からは、砂層と一部粘土層が混じり、木の枝を多く含む層が確認できた。結果的に、明確な地山を確認することはできなかったが、このような状況から、このレベルがほぼ池底であろうと判断した。また、この層からは30～40cm大の数個の石、11本ほどの立杭のようなものも確認した。しかし、年代等の詳細を明らかにすることはできず、そのままの状態を残して、調査を終了した。



第13図 貯水池跡41トレンチ位置図



第14図 貯水池跡41トレンチ周辺地形図



第15図 貯水池跡41 トレンチ全体図

②トレンチ【第16図上段】

41トレンチ南側の土段状高まりの北側裾部から北西方向に向けて設定した0.8m×5.0mの小トレンチである。土段状の高まりを堰堤と想定して、その前方部の構造解明と北側裾部に沿うような形で所在する溝の把握を目的とした。追加調査を開始した1月には、さらに、土段状の高まりの状況を確認するために南東方向へ8.0m延長することとなった。土層観察の結果、北側裾部に沿う溝（北側溝）については、上端幅約1.2m、深さ約50cmのV字形を呈する形状で、南側の土段状の高まりを断ち割って掘り込まれていたことから、後世に掘削された溝であると判断した。

遺構としては、北側溝のすぐ北に礫群を検出した。検出幅は約1.5mで、最大約15cmと比較的小振りの石を敷き詰めている状況が看取された。土器の細片も一部に混入していた。その直上には礫群を覆うような形で、南側で厚く、北側で薄れ消失する粘土層が確認できた。粘土層は北側溝を越えて南の土段状高まりの裾部にも認められた。礫群の北側には花崗岩パイラン土となる地山を確認した。

また、トレンチ北側に、強く締まった水平堆積層を確認した。中途までの掘削となったが、地山まで掘削した⑤トレンチにおいて検出した水平堆積層に続くものであることが判明した。

③トレンチ

第19次調査20トレンチにおいては、池跡である青灰色粘土と地山との境を検出した。あくまでも平面的な検出を目的とするものであったが、当該トレンチの埋土を掘削後、検出した地山が池底に向かってどのように下降するかを把握するために設定した小トレンチである。

薄く堆積する水成粘土層の下に、地山の崩落と考えられる砂層を確認した。この砂層が地山であるかどうかは判然としなかったが、20トレンチ埋土との関連が把握できる⑦トレンチによって層序を確認することとして、調査を終了した。

④トレンチ

第19次調査20トレンチの立ち上がりで、41トレンチ西側の地山を把握するために東西方向に設定した0.8m×5.0mの小トレンチである。その後、池の内部構造を把握するために東側へ延長し、41トレンチを東西に横断する延長14.0mのトレンチとした。西側部分では41トレンチ西壁を断ち割り、第19次調査20トレンチ部分を挟んで東側では、41トレンチ南側の土段状高まりを断ち割っている。

トレンチ西側においては、第19次調査で確認された地山の直上に、しまりのある水平堆積層が確認された。数層で構成され、一つの層の厚さは1～2cm程度と薄い。人為的な盛土と考えられる。この部分より西側は、一段落ちて水田として利用されたとの話があり、現在その先に水路があるが、さらに西側の尾根部分へと続くことも考えられる。トレンチ中央部では、土段状高まりの暗褐色土層中から青磁片が出土した。少なくともこの層以上は中世以降の堆積であることが判明した。これより下層においては、地山近くに多数の礫、遺物としていくつかの須恵器片、打製石斧などが確認された。また、地山は、東の池底に向かって下降し、途中段落ちしている状況が認められた。これは、後述する⑦トレンチと同様で、池の範囲を考える上で大きな手がかりとなった。同様に土段状高まりを断ち割ったトレンチ東側においては、水成粘土層上面までの掘削を実施したが、池の東岸の検出までは至らなかった。

結果的に、湧水が多く十分な確認作業ができなかったため、水成粘土層の上面までの掘削で調査を終了した。

⑤トレンチ【第16図下段】

②トレンチにおける水平堆積層と、南側の土段状高まりとの関係を把握することを目的に設定した、0.8m×6.0mの小トレンチである。②トレンチ北側にほぼ並行するような形で設定した。後に土段状高まりを断ち割る南側部分においては①トレンチと連結して調査を実施した。

小トレンチ中央付近の地山直上には、直径約1.0m大の大石が所在した。表土剥ぎの段階で、すでにその上

② T
Let118.00m



1. 灰褐色土 粘質。砂・灰化層は少ない。黒褐色の粘質ブロックを一部含む。
2. 黒褐色土 粘質。砂・灰化層は少ない。砂は多く灰化層が多い。
3. 黒褐色土 粘質。砂が少い。0.5cmの白い層を多く含む。
4. 黒褐色土 やや粘質。砂が多い。灰化層を多く含む。
5. 灰褐色土 粘質。砂が多い。0.5cmの白い層を多く含む。
6. 黒褐色土 粘質。砂が多い。0.5cmの白い層を多く含む。
7. 黒褐色土 粘質。砂が多い。0.5cmの白い層を多く含む。
8. 細かい黒褐色土 2層より厚い。砂を多く含む。

9. 黒褐色土 やや粘質。
10. 黒褐色土 粘質。砂が多い。0.1～0.5cmの白い層を多く含む。
11. 黒褐色土 粘質。砂が多い。花崗岩の塊を含む。
12. 黒褐色土 粘質。砂が多い。0.5～1.0cmの白い層が多い。
13. 灰褐色土 粘質。砂が多い。0.5～1.0cmの白い層が多い。
14. 黒褐色土 粘質。砂が多い。0.5～1.0cmの白い層が多い。
15. 細かい黒褐色土 2層より厚い。砂を多く含む。上部に黒褐色の粘土層がある。

⑤ T



1. 黒褐色土 粘質。1.0～3.0cmの塊を多く含む。
2. 黒褐色土 粘質。砂や粘質の塊状ブロック(1.0～3.0cm) 灰化層を多く含む。
3. 黒褐色土 粘質。砂を多く含む0.5～1.0cmの塊を含む。
4. 黒褐色土 0.5～3.0cmの黒化灰質層の塊を多く含む。
5. 黒褐色土 粘質。砂が多い。一部灰褐色土ブロックを含む。
6. 黒褐色土 粘質。砂が多い。一部灰褐色土ブロックを含む。
7. 黒褐色土 粘質。砂が多い。一部灰褐色土ブロックを含む。
8. 細かい黒褐色土 やや粘質。しまりあり。
9. 黒褐色土 粘質。砂が多い。0.1～0.5cmの白い層を多く含む。
10. 黒褐色土 粘質。砂が多い。0.1～0.5cmの白い層を多く含む。
11. 細かい黒褐色土 粘質。砂が多い。0.5cmの白い層を多く含む。
12. 細かい黒褐色土 粘質。砂が多い。0.5cmの白い層を多く含む。
13. 黒褐色土 粘質。砂が多い。0.5cmの白い層を多く含む。
14. 黒褐色土 粘質。砂が多い。0.5cmの白い層を多く含む。
15. 灰褐色土 粘質。0.2cm程度の粘土層を少量含む。

16. 灰褐色土 やや粘質。粘。0.5～1.0cmの塊状ブロック。0.5cmの塊を含む。
17. 灰褐色土 粘質。砂や粘質の塊状ブロックを多く含む。
18. 灰褐色土 粘質。0.5cmの白い層。1.0～2.0cmの塊状土。木片を含む。
19. 灰褐色土 粘質。砂を多く含む。
20. 黒褐色土 粘質。砂を多く含む。
21. 黒褐色土 粘質。砂を多く含む。少量の黒褐色土を多く含む。
22. 細かい黒褐色土 粘質。砂。灰化層。黒褐色土を多く含む。
23. 黒褐色土 やや粘質。砂を多く含む。
24. 黒褐色土 粘質。砂を多く含む。
25. 黒褐色土 粘質。砂を多く含む。1.0～5.0cmの塊を多量に含む。
26. 灰褐色土 粘質。砂を多く含む。
27. 灰褐色土 粘質。砂を多く含む。0.5～2.0cmの塊を多く含む。
28. 灰褐色土 粘質。少量の砂を含む。



第16図 貯水池跡41 トレンチ土層図

部が露出していたが、周囲に掘り込みが検出されたことから、後世に落とし込まれたものと判断したものである。その部分を挟み南側には、㊸トレンチ同様、多数の礫で構成され、土器片が混入する礫群を検出した。一部にかなりしまった粘土層で被覆した状況も認められた。地山との境には、砂層があり、南の池側に向かって少し低くなっている状況が看取できたが、南側の土段状の高まりの裾部には、先述した後世の溝が北東方向に走るため、土段状の高まりとの関係を押さえることはできなかった。この溝には、現在も多量の水が埋土中を流れている。

大石より北側では、㊸トレンチに続く砂層を中心とする水平堆積層が確認できた。上部は比較的しまりのある褐色土と暗灰色土の互層堆積となる。中位に段を有する急傾斜で下降する地山の上に堆積している状況が認められ、最下部までの掘削までは至らなかったが、周囲の状況から、北側水路の底のレベルまで続くことが推測できた。地山の整形は明らかに人為的なもので、その上に堆積していることから、盛土層であると結論づけた。ただし、それが堤防等の遺構のものであるかどうかは、南側の水成粘土層との関係が押さえられていない状況であったため、次年度以降に再度確認作業を行うこととして調査を終了した。

㊸トレンチ

41トレンチ西壁近くにおいて、㊸、㊹トレンチで確認した水平堆積層と地山との関係を把握することを目的として設定した0.6m×8.0mの小トレンチである。土段状の高まりが途切れる部分で、後世の溝に攪乱されず裾部から地山が続く状況が看守できた。

トレンチ南側で露出していた地山は北に向かいゆるやかに下降しており、中途に段を有する。この段は㊸トレンチや㊹トレンチに繋がるような方向に延びている状況が認められた。その上に㊸、㊹トレンチ同様、盛土層を検出した。トレンチ南側の地山直上から、遺物として須恵器の細片が出土したが、時期の特定までは至っていない。

㊹トレンチ

㊸トレンチの掘削により確認できなかった、池の掘り込みを把握することを目的として設定した1.0m×4.0mの小トレンチである。第19次調査20トレンチ埋土との関係を土層断面上で把握するため、41トレンチ南壁に沿うような形で設定した。

第19次調査20トレンチの埋土の下には、砂を多く含む青灰色の水成粘土層が認められたが、掘削したところほぼ垂直に落ち込む明確な地山の掘り込みを検出した。さらに、その掘り込みの裾部には、沿うような形で、幅約60cmほどの帯状の礫群が確認できた。そこから池底となる東側に向かっては地山はやや下降し、地山直上ではないが20～30cm大の石がまばらに粘土層中に含まれていた。遺物としては、須恵器片等を検出した。

検出した礫群は、先述した、北側の㊸トレンチ、㊹トレンチ、㊺トレンチで確認された礫群に連続するものと考えられた。

㊺トレンチ

㊸、㊹、㊺トレンチで確認した盛土層が、北側水路の南東壁に沿って北東方向に続くと考えられたため、それを把握することを目的として設定した1.0m×8.0mの小トレンチである。北側水路南東壁には、後世の所産と考えられた石垣があり、その確認も含めて盛土遺構想定ラインと直交するような形で設定した。結果的に、地元からの聞き取り等により決壊した箇所を補強のため石積みしていたことが判明したが、その内容どおり石垣の裏側に決壊に伴う落ち込みのラインが認められ、土を充填した上に石積みしている状況が確認できた。その埋土は非常にやわらかいものであった。

盛土層と考えられた層を掘削していくと、小さなもので5～6cm、大きなもので20cm超の多くの石群を検出した。石群は北側水路に向かって緩やかに下降している状況が認められた。また、トレンチ壁面の土層観

察から、水平堆積層を確認した。ただし、層厚10cm以上あるものもあり、土色及び含有物等において⑤トレンチ等で確認された水平堆積層とは様相を異にするものであり、連続する層でないことが明らかとなった。

また、トレンチ南東側においては、砂層と粘土層の互層堆積が認められたが、そのうち一つの粘土層上に、約10cmの窪みがいくつかが確認された。版築に伴う突き棒の痕跡である可能性があったが、当該トレンチの水平堆積層を明確に盛土層として位置づけてよいものかどうか判断できなかったため、次年度の検討課題として調査を終了した。

③トレンチ

②、④、⑤トレンチで検出された水平堆積層が西側土壁線から派生してくる尾根に接続するかどうかを把握することを目的として、41トレンチ西側を南北に走る水路（現在の水路）の東壁を利用して設定した小トレンチである。

以前に一段下がった水田であった箇所と一部重複しており、その状況を確認することも視野に入れて壁面の精査を行ったが、結果的に明確な土層等を確認することはできず、調査を中断した。

⑥トレンチ

⑤トレンチで確認した盛土層と④トレンチで確認した土層との境付近に、北側水路に向けて走る溝状の掘り込みを検出した。延長線上の北側水路の壁面には水抜きのための塩ビ管が刺さっていたため、近年掘削されたものである可能性が高かった。しかし、池の排水溝として妥当な位置であったためその構造を把握することを目的として設定した0.8m×3.0mの小トレンチである。溝状の掘り込みに対して直交するような形で設定した。

埋土中に、最大のもので50cm以上になるような石が多数混入し、それ以上の掘削を行えない状況となり、具体的な構造を把握するまでは至っていない。

⑩トレンチ

②トレンチ内の礫群上面で見られた粘土層の平面的な広がりを確認することを目的として設定した1.0m×3.0mの小トレンチである。⑤トレンチにおいてもその粘土層は確認されており、②、⑤トレンチとの間に平行して設定した。

調査の結果、粘土層とその広がりの確認でき、さらに、北側溝を挟んだ南側部分においても、土段状の高まり下部において同様の粘土層を検出した。ただし、北側溝、土段状の高まりとの関係を把握するまでは至っていない。

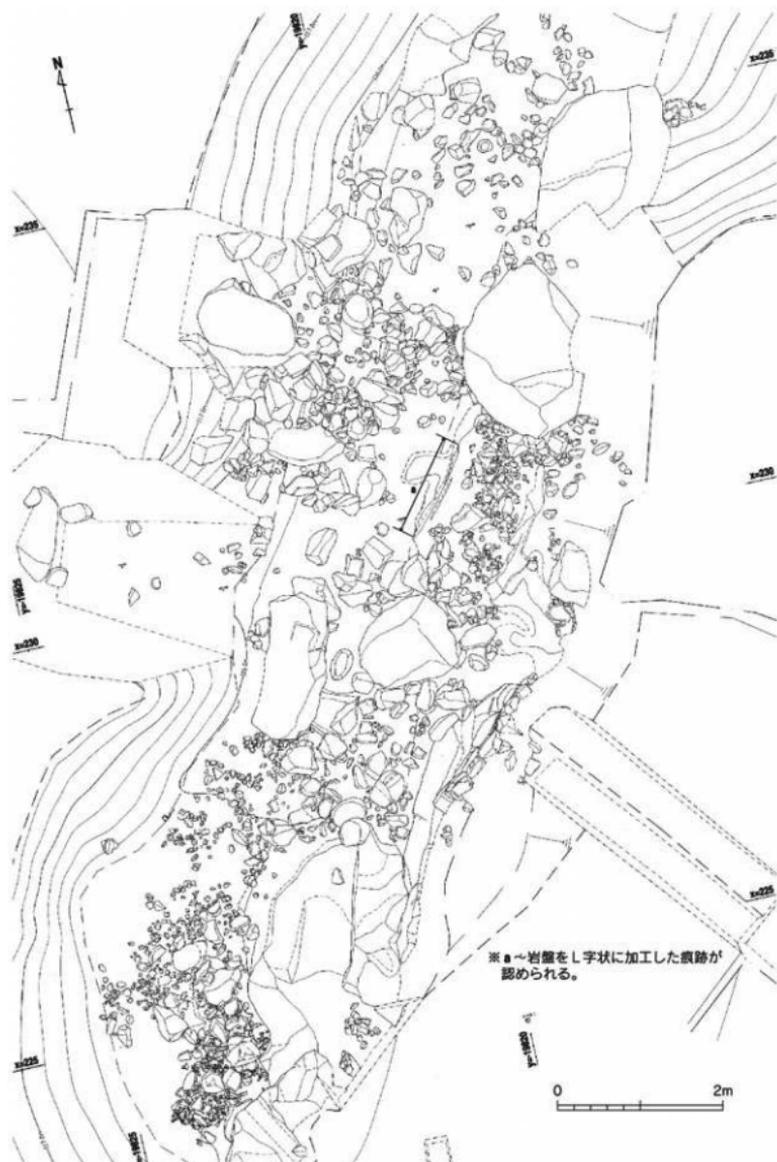
⑫トレンチ

③トレンチ西側への礫群の広がり、水成粘土層の広がりを把握することを目的として設定した2.0×4.0mの小トレンチである。北側溝の北壁において、礫群や水成粘土らしき層を確認できたことにより、当該箇所に設定した。

調査の結果、粘質土の下に多くの礫・石が集積し、トレンチ西側の比較的大きな石の周囲に礫群が認められない箇所もあったが、基本的にはトレンチ北側へと続く状況が認められた。トレンチ北側には、地山である花崗岩・パイラン土の地山が露出しており、その際まで礫群が続いていたが、その関係を把握するまでは至らなかった。

⑬トレンチ

③トレンチ南側ですでに地山が露出していたため、それに近い東側において、池底に向かってどのような地形変化があるかを知ることを目的として設定したトレンチである。結果的に、十分な調査を進めることはできなかった。



第17図 北側水路内集石状況

北側水路〔第17図〕

北側水路は、以前、農業用水の水路として機能していたもので、平成11年度の付け替え工事の折、南西部を埋め立てその機能を消失することとなった。その付け替え工事の契機となったのが、池底に集積する多数の礫・石と、東壁裾の一部に認められた加工痕跡らしきL字状の段差を有する岩盤の存在であった。当時、遺構かどうかははっきりしなかったが、石積み等の遺構が想定されたため、予定していた掘削を中止し、付け替え工事を実施したのであった。現在も、地表面あるいは地下を伝い水が集まる。水路東壁と底部に堆積した土砂の除去作業を行い、現存状況の把握を目的とした調査を実施した。

調査の結果、水路東壁には、花崗岩の地山が露出している部分が多く、その地山に掘り込んだ溝状の掘り込みが数箇所確認できたが、そのうちの一つ、㊸トレンチの所見で述べた塩ビ管を差し込んだものは、幅約20cmで、垂直な壁をもつものであった。

先述した加工痕跡らしき段差については、北東から南西にかけて水路に沿った直線的なものとなっており、意図的に整形した様子が認められた。さらに、この加工痕跡の上部は、奥に向かってさらに地山をカットしている状況が認められ、その上に、比較的小さな多数の礫が集積していることから、基底部に礫を敷いた上部構造が考えられ、下部の段差は、基底部前面を表現した加工痕跡ではないかと推察した。

また、水路西壁側については、その基底部から、礫・石が下にもくり込むような形で検出されており、多数の礫・石が下に埋没していることが予想される。このため、西壁側の土は、後世に埋め戻した2次堆積土の可能性が高い。

こうした周囲の状況から、前面に石積みを加えた堰堤の存在が想定されたが、水路内に集積する礫・石に原位置を保つもののがはっきりと認められておらず、確定できないまま調査を終了した。

3 出土遺物

貯水池跡41トレンチにおける出土遺物については、池の流末の池尻部であるという調査箇所の上地上、出土量も少なく、また、いずれも細片であった。このため、時期を遡るものはごく限られた状況にあった。種別としては、須恵器、土師器、瓦等の古代の遺物が主であるが、このほか、石器などの前時代遺物や青磁・白磁、瓦質土器等の中世の遺物が混在する状況が認められた。このうち比較的良好な資料を掲載することとした。以下にその所見を述べる。

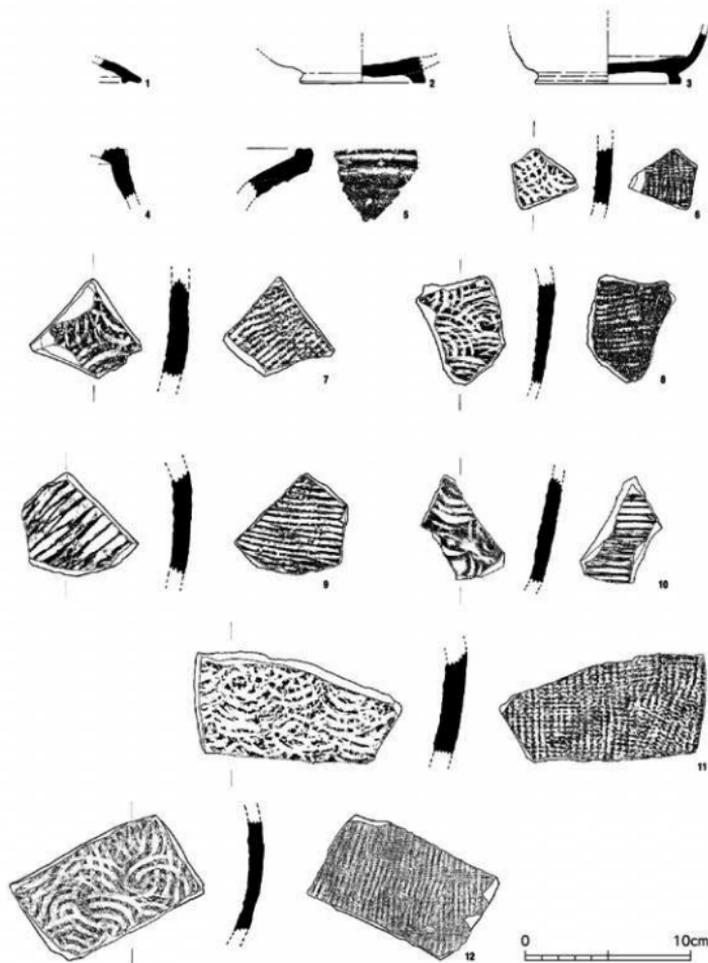
1) 須恵器〔第18図〕

1は、杯蓋の口縁部片である。残存高1.4cm、器厚0.5cmで、焼成はやや不良。器壁は薄く、扁平な器形が予想される。口縁部をやや尖り気味に仕上げている。端部より約0.9cm内側に、高さ0.3cmの端部を丸く仕上げたかえりが付く。内・外面ともにナデ調整を施す。

2は、高台付杯の底部片である。高台径7.6cm、高さ0.5cmの高台がしっかりと残っている。高台の端部は幅0.7cmと太めで、平たく仕上げる。器形はやや丸みを帯びながら立ち上がっていくものと思われる。底部の厚さは、0.5～0.8cm。内・外面ともに丁寧なナデ調整を施すが、底部は切り離し後未調整である。

3は、高台付杯の底部・体部片である。器形はやや丸みを帯びた形で立ち上がることが予想される。底部端よりやや内側に、高さ0.6cmの高台が付く。高台の端部はやや外側につまみ出し、肥厚する。内底面には不整方向のナデ、外底面には、回転ヘラ切り後、ナデ調整を施す。

4は、高杯の脚部片で、杯部に取りつく接続部となる。残存高は2.5cmで、焼成は非常に良い。脚部は、厚手でやや外に反りながら下降する。内・外面ともに丁寧なナデ調整を施す。杯部と脚部の取り付けについては明瞭に観察できなかった。



第18図 貯水池跡41トレンチ出土遺物①

5は、甕の口縁部片である。残存高3.0cm、器厚1.1cm。口縁端部はヘラ状工具でやや凹面状に仕上げ、端部より1.3cm下に太い稜をもつ。内器面には丁寧なナデ調整を施し、外器面にはヘラ状工具による削りが認められる。

6～12は、甕の胴部片である。いずれも細片で、どの部位かは明確には判断できない。

6は、器厚0.9cm、外器面に細格子目タタキを施し、内器面に同心円の当て具痕が残る。

7は、器厚1.1～1.2cm。外器面に平行タタキを施し、内器面に同心円の当て具痕が残る。

8は、器厚0.6～1.0cm。外器面に横方向の平行タタキ後ナデ調整を施し、内器面に同心円の当て具痕が残る。

9は、器厚1.0～1.1cm。外器面に横方向の平行タタキを施し、内器面に斜方向の当て具痕が残る。

10は、器厚0.7～0.9cm。外器面に横方向で太めの平行タタキを施し、内器面に同心円の当て具痕が残る。

11は、器厚1.2～1.3cm。外器面に細格子目タタキ後、ナデ調整を施し、内器面に同心円の当て具痕が残る。

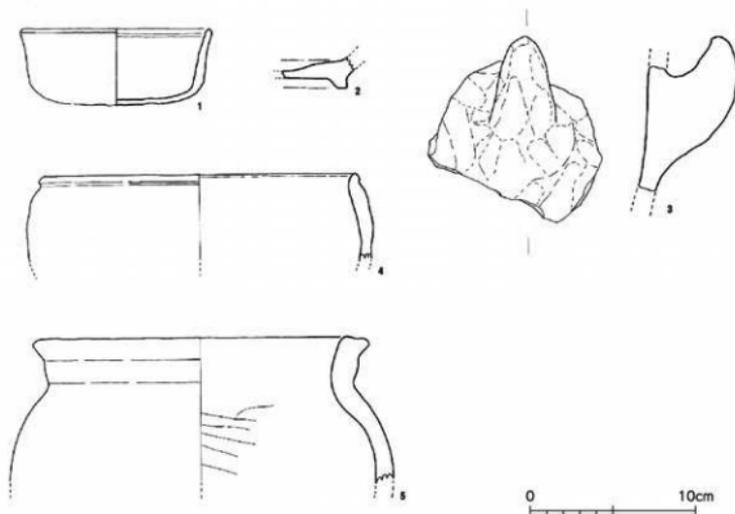
12は、器厚0.7～0.9cm。胴部最大径付近の破片と思われる。外器面に縦方向の平行タタキ後、横方向のナデ調整を施し、内器面に同心円の当て具痕が残る。

2) 土師器 (第19図)

1は、坏片である。復元口径11.5cm、復元底径10.0cm、高さ4.2cm。器形は、やや丸みを帯びた底部より2/3程度上から外反気味に立ち上がる。口縁端部を丸く仕上げる。端部より0.4cm下がった内側に0.2cm幅の沈線を巡らす。内・外器面ともにナデ調整を施しており、内器面の底部近くにわずかな赤色顔料が付着する。

2は、高台付坏の底部片である。底部端に、端部を平たく仕上げた逆台形の高台を有する。肉厚な高台で、基部が1.0cm、端部が0.6cmを測る。底部は中心に向かって器厚が薄くなる。全体的に丁寧なナデ調整を施し、内・外器面ともに赤色顔料が付着する。

3は、甕の取手片である。取手は取り付け部からやや上向きに立ち上がり、中程より垂直方向に向きを変える。端部は、尖り気味に整形している。整形のための指ナデ痕や取り付け部には指押さえの痕が明瞭に残る。



第19図 貯水池跡41トレンチ出土遺物②

4は、無頸壺の口縁～胴部片である。口縁部は明瞭なくびれを持ちながらやや外方向に開き、端部を丸く仕上げる。口縁端部から3.8cm下がったところが胴部最大径となる。比較的丁寧な造りで、内器面は横方向のナデ調整を施し、口縁部からやや下がったところから一部に縦方向のナデも認められる。外器面は1.0cm単位のヘラ削り後、ナデ調整を施す。

5は、短頸壺の口縁～胴部片である。口縁部は外方向に開き、端部は明確な窪みを持つ凹面となり、外側にひねり出す。頸部のくびれは明瞭で、胴部は丸みを帯びる。胴部最大径は23.4cmを測る。内器面には左上から右下への斜方向のナデ調整が認められる。

3) 瓦〔第20図〕

1は、丸瓦の狭・側端部片である。厚1.5～2.2cm。側端部にはヘラ調整を施すが、外端近くに、切断後未調整の折り取り痕が残る。凸面は丁寧なナデ調整を施し、凹面はナデ調整を施すが、部分的に布目圧痕が残る。凹面狭端部近くに指押さえ痕が明瞭に残る。

2は、平瓦の側端部片である。厚1.9～2.4cm。側端部の残りは悪いが、ヘラ調整で整形したことが僅かに認められる。凹面はナデ調整を施すが、僅かに布目圧痕が残る。4.0～4.7cm幅の横骨痕が認められる。凸面はナデ調整を施す。

3は、平瓦の狭端部片である。厚1.2～1.8cm。狭端部をヘラ調整で整形する。凹面には布目圧痕が明瞭に残り、狭端部近くを指押さえて整形している様子が認められる。凸面はナデ調整を施す。

4は、平瓦の狭端部片である。厚1.8～2.3cm。狭端部をヘラ調整で整形するが、さらに凹面側の0.6cmを、横方向のヘラ調整により端部に向かって斜めに整形する。凹面はナデ調整を施すが、布目圧痕が残る。幅4.5～4.8cmの横骨痕が残る。凸面はナデ調整を施す。

4) その他の遺物〔第21図〕

1～5は、土師質土器である。

1は、小皿片である。復元口径8.0cm、復元底径6.4cm、高さは1.0cm。器形は、底部から外傾しながら立ち上がり、端部をやや尖り気味に仕上げる。内・外器面とも丁寧なナデ調整を施す。

2は、小皿の口縁～底部片である。器形は、外傾しながら立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。外底面に板目状の圧痕が明瞭に残る。

3は、杯の口縁部片である。復元口径17.0cm。器壁は厚く、器形はほぼ直線的に立ち上がることが予想される。口縁端部を丸く仕上げる。内器面は丁寧なナデ調整が施され、外器面はヘラ削り後、ナデ調整を施す。

4は、杯の口縁～体部片である。器形はやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部近くでやや外方向に開く。端部を丸く仕上げる。

5は、杯の底部片である。器形は、底部端から比較的开き気味に立ち上がる。底厚は0.4cmで、体部厚は0.5cm。内器面は凹凸となりながら丁寧なナデ調整を施し、外器面は、糸切り後、丁寧なナデ調整を施す。

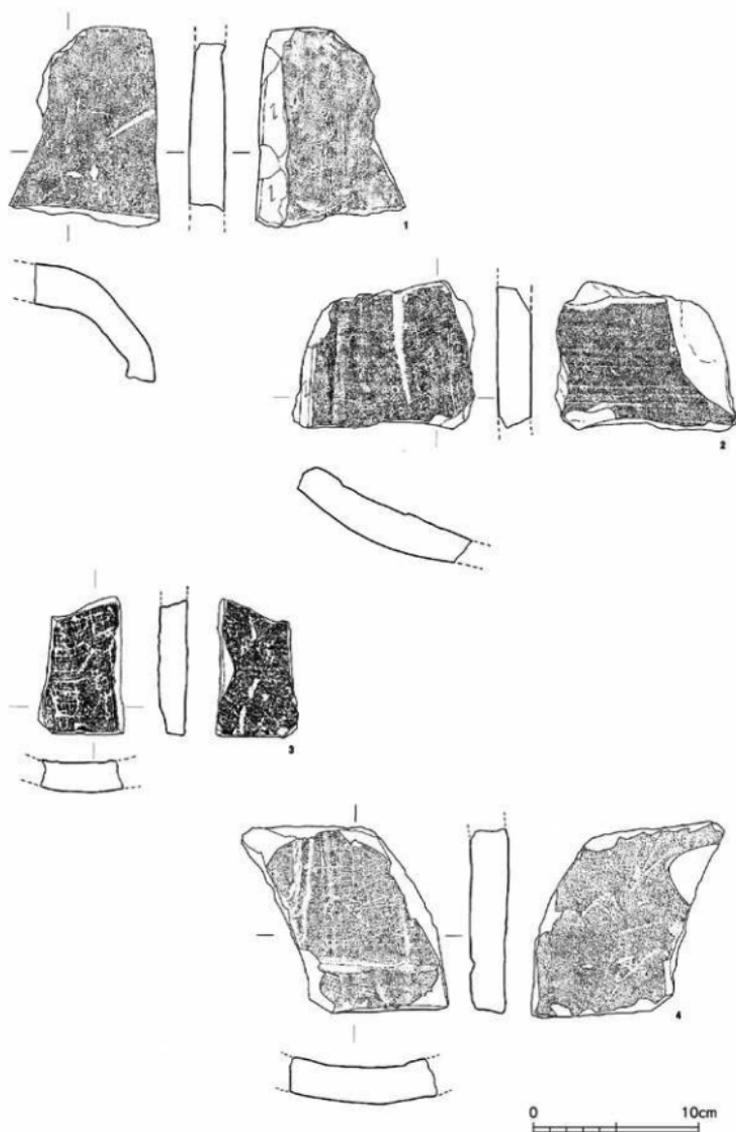
6は、白磁の口縁部片である。残存高は、2.5cm、器厚0.4cm。ゆるやかに立ち上がり、端部をやや外側に向かってひねり出す。

7は、青磁の口縁部片である。残存高1.8cm、器厚0.6cmとやや厚手。器形は、ゆるやかに立ち上がり、端部に向かってやや開く。外器面に蓮弁を表現する。

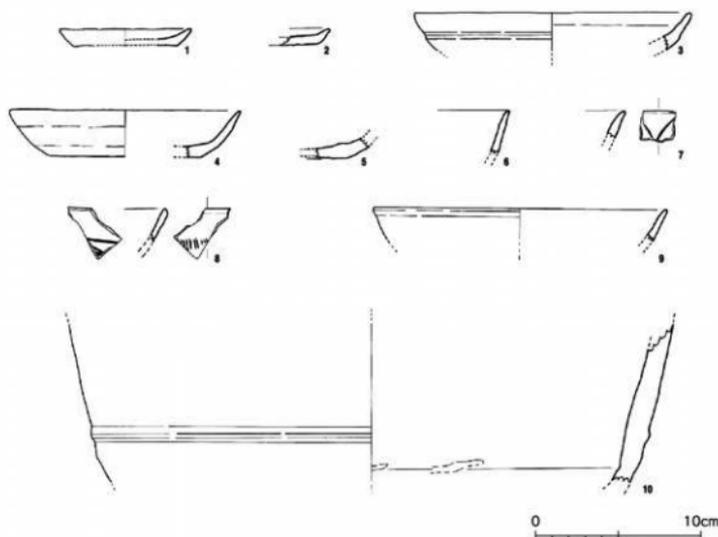
8は、青磁の口縁部片である。残存高3.0cm、器厚0.3cm。器形はゆるやかに立ち上がり、端部をやや尖り気味に仕上げる。外器面に縦方向の短い沈線文様があり、内器面にも文様（不明）が施されている。

9は、青磁の口縁部片である。復元口径17.8cm、残存高2.0cm、器厚0.5cm。器形はゆるやかに立ち上がり、口縁端部外側はやや肥厚する。

10は、瓦質土器の火鉢片である。胴部から底部近くにかけての小片。器形は、底部からやや傾斜しながら立ち上がる。下端近くに突帯を持ち、突帯部分での復元径は34.0cmを測る。



第20図 貯水池跡41トレンチ出土遺物③



第21図 貯水池跡41トレンチ出土遺物④

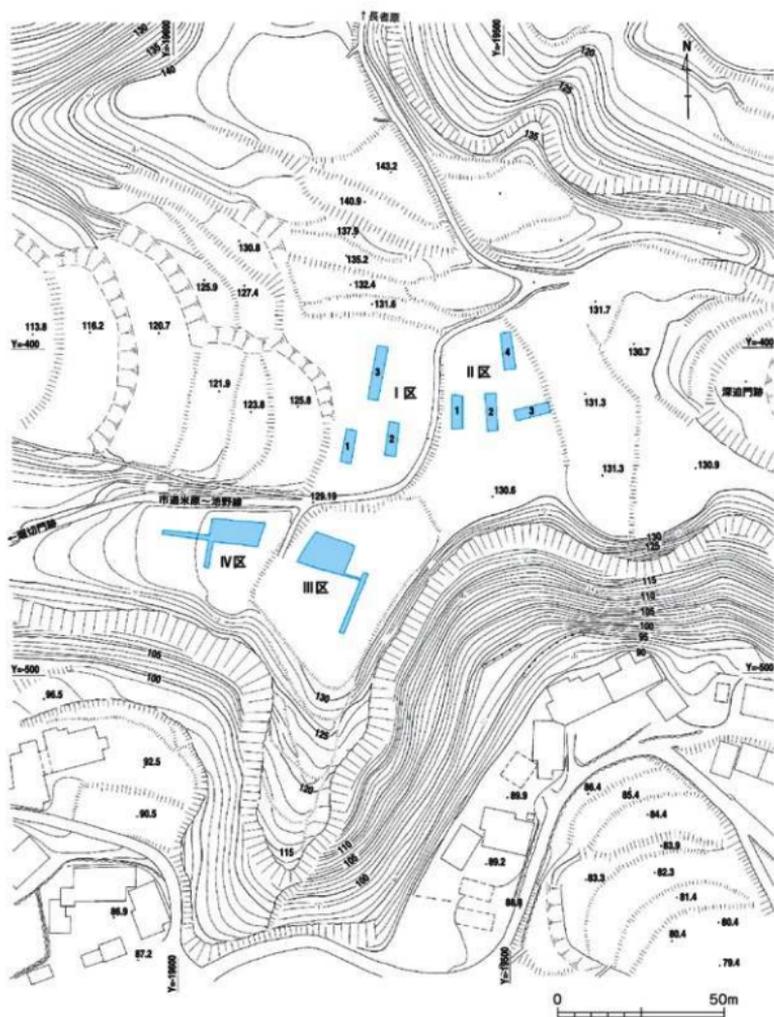
第3節 深迫門跡西側平坦部の調査

1 トレンチの設定

城城の南東部、深迫門跡の西側一帯に所在する平坦部である。西に向かって開口する池の尾谷の谷頭付近に当たる箇所、市道米原～池野線の両脇にある平坦地2面を調査対象とした。比較的広い平坦地であることから整備事業により広場整備が予定されており、そのため、事前確認調査を実施することとなった。上・下2段に分かれており、下段を深迫門地区Ⅰ区、上段をⅡ区と名称を付けて調査を実施することとした。

現地地形では、Ⅰ区は南北にやや細長い弓なりの平坦面で、市道を挟みⅡ区より約1.3m下がった場所となる。北側には頂部に「堂の下」地名が残る平坦地が所在する高まりとなり、その斜面部は帯状の細長い平坦地を有する段地形となる。南側も、後述する南外郭線平坦部が所在する高まりとなり、谷筋に造成された平坦地の様相を呈する。東側のⅡ区は、比較的広めの平坦面で、その北側には第3次調査で実施した深迫土塁が所在する尾根状の高まりがあり、南側は同じレベルを保ったまま南外郭線の崖地となる。深迫門跡に向かう東側は、一段高まる平坦面が帯状に広がる。こうしたことから、当該地形が鞠智城築城当時のものか後世の造成によるものか、2つの可能性が想定されたため、その解明を目的とした。〔第22図〕

各平坦地におけるトレンチについては、周辺地形を考慮した上で任意に設定することとした。まず、Ⅰ区については、平坦地南寄りに谷筋に直交する形で、西側に10.2m×3.5mの南北トレンチ（1トレンチ）を、東側に10.1m×3.5mの南北トレンチ（2トレンチ）を、平坦地中央近くに谷筋と直交する位置に16.6m×3.5mの南北トレンチ（3トレンチ）をそれぞれ設定した。また、Ⅱ区については、平坦地中央西際近くに、谷筋

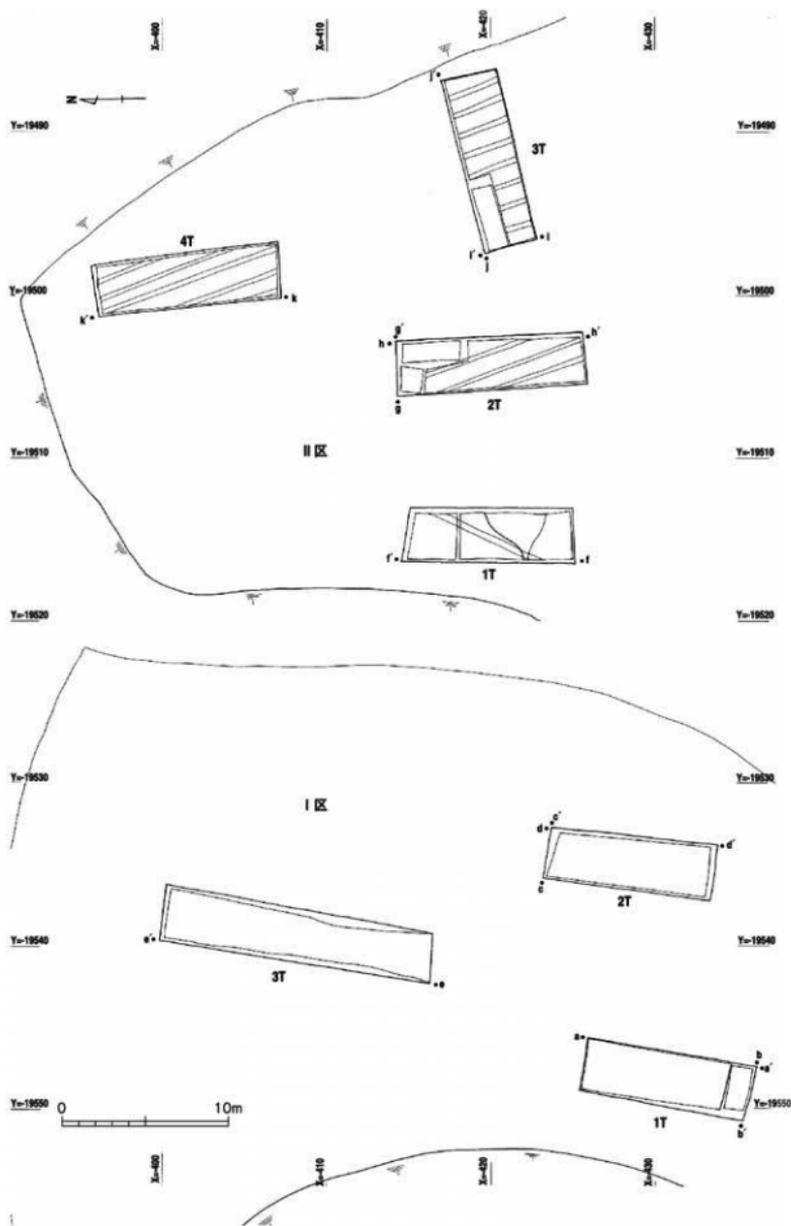


第22図 深迫門跡西側一帯地形図

に直交する形で10.6m×3.5mの南北トレンチ（1トレンチ）、その東側に11.6m×3.5mの南北トレンチ（2トレンチ）、その東側、谷頭部分を検出するために11.0m×3.5mの東西トレンチ（3トレンチ）、平坦地北寄りに谷筋に直交する11.2m×3.5mの南北トレンチ（4トレンチ）をそれぞれ設定した。〔第23図〕

2 遺構について

深迫門地区Ⅰ・Ⅱ区の計7本のトレンチ調査により、谷頭を後世に埋め立てた平坦地であることが判明した。



第 23 图 深迫門地区 I · II 区平面图

旧地形は、Ⅱ区の東側際近くまで谷地形であり、谷の中心部は、Ⅰ区3トレンチのやや南側を走ることが明らかとなった。

以下に、各区におけるトレンチの成果を述べる。

1) 深迫門地区Ⅰ区〔第24図〕

1トレンチ

南側が市道米原～池野線を挟み、1段高い平坦地となるため、下層部分が南に向かってやや上傾し、また、谷頭方向となる東に向かって上傾する堆積が認められた。精査の結果、1～10層に区分でき、うち2、3層はしまり具合から2つに細分できた。9、10層は地山であるが、9層は小石、炭化粒が混入することから、やや攪拌された層となる。

堆積層は、大きく3段階に区分できた。上から、1つめは、3a、b層を整地層とするもので、4層が有機物層であることから一定の期間を経て整地されたものと考えられる(A)。次に、4～6層でそれ以前の旧耕作土層となる(B)。続いて、7、8層で、旧耕作土あるいは整地層と考えられる層である(C)。地山との境に有機物等が混入する層が存在しないことから、Cは地山整形直後に堆積した層と考えられる。

2トレンチ

1トレンチ同様、南側は市道米原～池野線を挟み1段高い微高地となり、南に向かってなだらかに上傾する堆積が認められた。精査の結果、1～8層が確認でき、うち5層は黄褐色の粘土ブロックの有無により2層に細分できた。地山は、7、8層で、北に向かってなだらかに下降したが、7層の堆積が南側には認められないことから明らかに削平された状況であった。

堆積層については、1トレンチと違ってAは確認できないが、B(2～4層)、C(5a、b、6層)とが認められた。

3トレンチ

平坦地北側は先述のとおり段造成がなされた微高地となるため、南に向かってなだらかに下降する堆積となる。精査の結果、1～8層が確認でき、地山(8層)はトレンチ北側においては、平坦に切土した状況が認められ、谷底となる南に向かっては緩やかに下降する状況が認められた。

堆積層は、2トレンチと同様、B(2～4層)とC(5～7層)は認められるが、Aは確認できなかった。

以上、当該平坦地の形成過程については、もともと谷地形であった箇所を、南北両側及び東側を切土するなど地山整形を行った上で耕作地としての造成(C)が行われたものと考えられる。その後、再度、耕作地としての造成(B)が行われたものと考えられる。また、部分的にみられるAについては、隣接する井戸の掘削により生じた土と考えられる。

2) 深迫門地区Ⅱ区〔第25図〕

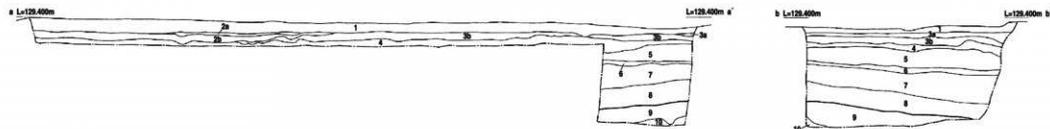
1トレンチ

表土の下に、整地層(4層)(E)が認められた。また、土層図には表われていないが、4層上面に堆積する明褐色粘質土層(D)が確認でき、これも整地層となる。平坦地の西側部分に、深く堆積する。また、他のトレンチで検出したものと主軸を異にする耕作溝(2層)を1条確認した。

2トレンチ

表土の下に、黒褐色土(3層)が堆積し、1トレンチで検出されたローム土をベースとする明褐色粘質土層(4、5層)(D)がトレンチ北西隅に認められた。6、7、8層は整地層(E)と考えられ、ほぼ同様の土であるが、下層に向かって粘質の度合いが高くなる。また、3層を掘り込む北北西～南南東の耕作溝(2層)を5条確認した。

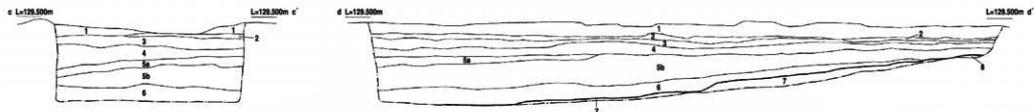
I区-1T



I区-1T

- | | | | |
|----------|--|----------|--|
| 1. 黒褐色土 | 炭らがい、黄土。 | 5. 暗褐色土 | しまりあり、粘質。0.5~1.0cm大の小石を少量、黄褐色粒と炭化粒を含む。 |
| 2a. 暗褐色土 | しまりあり、やや粘質。暗褐色粒、炭化粒を少量含む。0.5cm大の小石を多く含む。 | 6. 暗褐色土 | 5層に比べて、しまりはない。砂質。0.5~3.0cm大の軽石を含む。 |
| 2b. 暗褐色土 | 2a層より炭らかく、粘性がない、やや固い。 | 7. 暗褐色土 | しまりあり、粘質。0.5~1.0cm大の小石、黄褐色粒、炭化粒を含む。 |
| 3a. 暗褐色土 | しまりあり、やや粘質。0.5~1.0cm大の砂粒を多量に含む。炭化粒を少量含む。 | 8. 暗褐色土 | しまりあり、やや粘質。7層に比べて、基本的に7層に似るが、不純分の含有が少ない。 |
| 3b. 暗褐色土 | やや粘質。基本的に3aに似る。 | 9. 暗褐色土 | 粘質。ややまとる程度。中石に炭化粒を含む。(地山) |
| 4. 暗褐色土 | ややしまる。0.5~1.0cm大の小石を少量、黄褐色粒、炭化粒を含む。 | 10. 暗褐色土 | 粘質土。しまり有り、炭化粒を含む。(地山) |

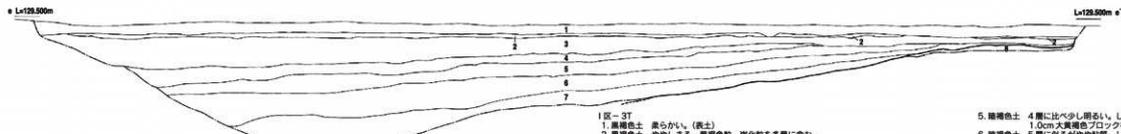
I区-2T



I区-2T

- | | | | |
|----------|--------------------------------------|---------|----------------------------|
| 1. 黒褐色土 | 炭らがい(黄土) | 6. 暗褐色土 | 5層に比べやや暗い、しまりがありやや粘質。 |
| 2. 黒褐色土 | しまりあり、黄褐色粒、炭化粒を多量に含む。 | 7. 暗褐色土 | 粘質土。固くしまる。粘質。不純物を少量含む。(地山) |
| 3. 暗褐色土 | ややしまる。黄褐色粒、炭化粒及び0.5~2.0cm大の軽石を多量に含む。 | 8. 暗褐色土 | 粘質土。固くしまる。粘質。不純物を少量含む。(地山) |
| 4. 暗褐色土 | 3層よりしまる。基本的に3層に似る。 | | |
| 5a. 暗褐色土 | しまりあり、黄褐色粒、炭化粒。0.5~2.0cm大の軽石を少量含む。 | | |
| 5b. 暗褐色土 | 1.5~2.0cm大の黄褐色ブロックを多量に含む。 | | |
| 5c. 暗褐色土 | しまりあり、やや粘質。5a層に似るが黄褐色ブロックを含まない。 | | |

I区-3T



I区-3T

- | | | | |
|---------|---|---------|---|
| 1. 黒褐色土 | 炭らがい、(黄土) | 5. 暗褐色土 | 4層に比べ少し暗い、しまりあり、黄褐色粒、炭化粒を含む。0.5~1.0cm大の軽石、1.0cm大黄褐色ブロックを多く含む。 |
| 2. 黒褐色土 | しまりあり、黄褐色粒、炭化粒を多量に含む。 | 6. 暗褐色土 | 5層に似るがやや粘質、しまりあり、5層と比べ不純分が少ない。 |
| 3. 暗褐色土 | 2層に比べやや炭らがい。黄褐色粒、炭化粒を少量含む。0.5~3.0cm大の軽石を含む。 | 7. 暗褐色土 | 5層に比べやや暗い、しまりあり、やや粘質。基本的に5層に似るが不純分がさらに少ない。 |
| 4. 暗褐色土 | 基本的に3層と同質であるが、ややしまり、軽石の量が多く、最大5.0cm大のものを含む。 | 8. 暗褐色土 | 粘質土。地山(褐色粘土層)に6層が入り込んだ土。炭化粒を含む。 |



第24図 深迫門地区I区トレンチ土層図

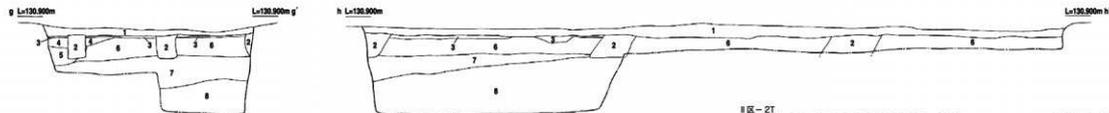
Ⅱ区-1T



Ⅱ区-1T

1. 黒褐色土 柔らかい、灰土。(堀の耕作土)
2. 暗褐色土 しまりあり、暗褐色ブロック混入。耕作跡のトレンチャーの跡。
3. 暗褐色土 固くしまる。0.5～3.0cm大の小石を多く含む。炭化粒を少量含む。整地層。
4. 暗褐色土 やや粘質で、しまりは強い。0.5～1.0cm大の小石を含む。

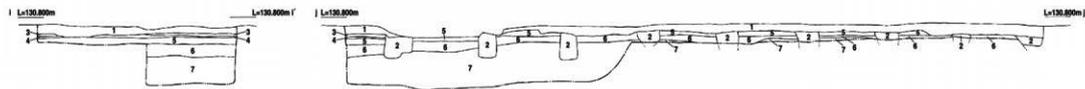
Ⅱ区-2T



Ⅱ区-2T

1. 暗褐色土 0.5cm大の小石、黄褐色粒を多く含む。(表土)
2. 暗褐色土 1.0cm大の小石、黄褐色粒、炭化粒を含む。(堀の耕作土)
3. 黒褐色土 0.5cm大の小石を多く含む。黄褐色粒、炭化粒を少量含む。
4. 暗褐色土 炭化粒を含む。黄褐色粒を少量含む。
5. 暗褐色土 粘質。暗褐色土ブロック、炭化粒を多く含む。黄褐色粒を少量含む。
6. 暗褐色土 砂質。0.5～2.0cm大の小石を多く含む。
7. 暗褐色土 やや粘質。少量の炭化粒、黄褐色粒を含む。
8. 暗褐色土 粘質。ごく少量の炭化粒、黄褐色粒を含む。

Ⅱ区-3T



Ⅱ区-3T

1. 暗褐色土 表土
2. 暗褐色土 0.5cm大の小石、黄褐色粒を多く含む。
3. 暗褐色土 0.5cm大の小石、黄褐色粒を多く含む。炭化粒を少量含む。
4. 暗褐色土 砂質。0.5～2.0cm大の小石を多く含む。
5. 暗褐色土 炭化粒、黄褐色粒を少量含む。やや粘質。
6. 暗褐色土 ごく少量の炭化粒、黄褐色粒を含む。粘質。
7. 暗褐色土 1.0cm大の小石、黒褐色土ブロック、炭化粒を含む。

Ⅱ区-4T

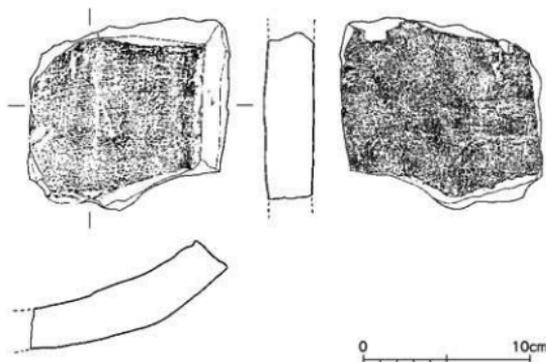


Ⅱ区-4T

1. 黒褐色土 柔らかい、灰土。(堀の耕作土)
2. 暗褐色土 しまりあり、暗褐色ブロック混入。耕作跡のトレンチャーの跡。
3. 暗褐色土 粘質でややしまる。暗褐色粒、炭化粒を含む。
4. 暗褐色土 粘質で固くしまる。混入物なし。(地山)



第25図 深泊門地区Ⅱ区トレンチ土層図



第26図 深迫門地区Ⅰ区2トレンチ出土瓦

3 トレンチ

表土の下に、黒褐色土（3層）が堆積する。4、5、6層は整地層（E）で、2トレンチ同様、下層に向かい粘質の度合いが高くなる。また、耕作溝（2層）を9条確認した。

4 トレンチ

トレンチ北半分以上に、地山（4層）を削平して平坦地を作り出している様子が看取できた。3層は地山を攪拌した層で、それら層を掘り込む耕作溝（2層）を5条確認した。

以上、深迫門地区Ⅱ区の平坦地の形成は、深迫門地区Ⅰ区と同様、耕作を目的に、もともとの谷地形を切・盛土して造成されたものと考えられる。

3 出土遺物

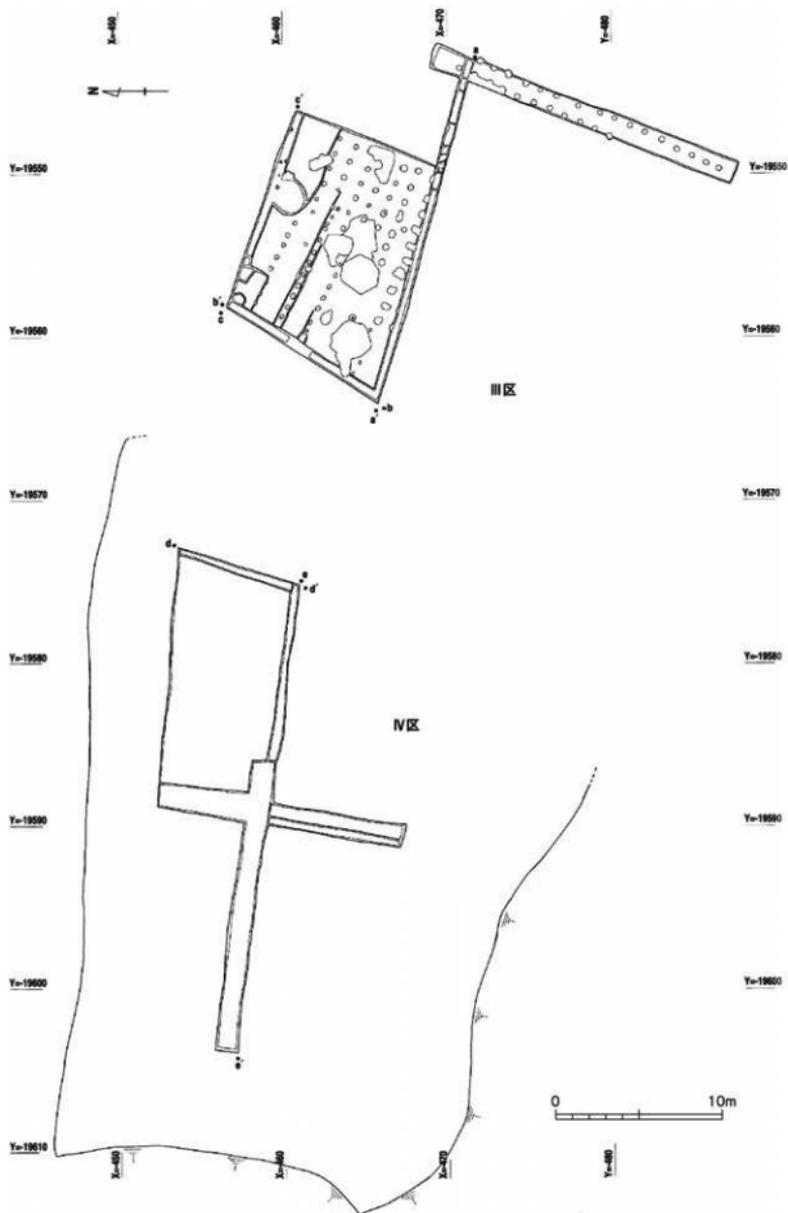
当該調査区における出土遺物については、陶磁器片など若干量採取されたほかは、Ⅰ区2トレンチ地山面直上から出土した平瓦片1点がある〔第26図〕。平瓦片は、広端部近くの側端部片で、厚さ2.8～3.1cmと比較的厚手。凹面には約5.0cm幅の模骨痕、布目圧痕が残り、側端部近くにナデ調整を施す。凸面はナデ調整を施す。側端部はヘラ調整が施されているが、凸面近くは、一部ナデ調整が施されているものの、未調整で粘土塊が付着する。

第4節 深迫門地区南外郭線平坦部の調査

1 トレンチの設定について

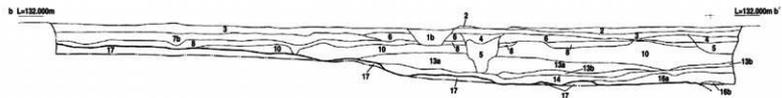
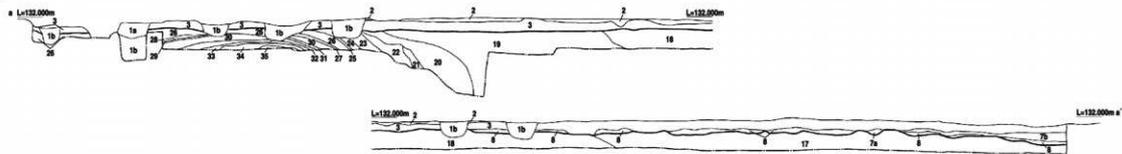
城域の南東部、深迫門跡の西側一帯に所在する平坦地のうち、南外郭線に隣接する平坦部である。先述した深迫門地区Ⅰ区から市道米原～池野線を扶んだ南に位置し、市道より2.0～3.0m以上の微高地となる。南側は、下の堀切集落に接する窪地となり、その上端部に外郭線が巡るものと考えられている。深迫門地区Ⅰ・Ⅱ区同様、整備事業に伴う広場整備が予定されている箇所である。

平坦部は、比高差2.0mの上下2段（深迫門地区Ⅲ・Ⅳ区）に分かれており、過去に瓦片が採取されていることから建物遺構の存在が想定された。このため、比較的広いトレンチを設定することとし、当初、上段



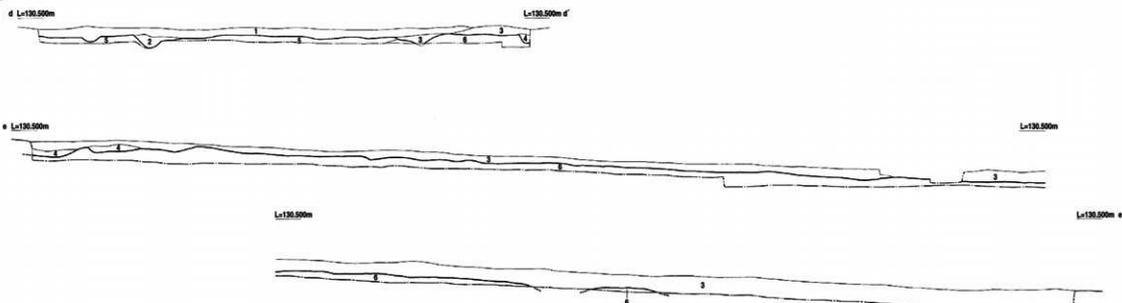
第 27 图 深迫門地区Ⅲ・Ⅳ区平面图

III区



- III区
- 1a. 褐色土 炭化殻、0.5～1.0cm大の黄褐色殻を多く含む。(耕作土)
 - 1b. 褐色土 やわらかい。黄褐色殻、炭化殻を多く含む。0.5～1.0cm大の小石を少量含む。(耕作土)
 - 2. 暗褐色土 粘多量を含む。(黄土)
 - 3. 褐色土 砂、黄褐色殻、炭化殻を多く含む。(黄土)
 - 4. 褐色土 1.0～4.0cm大の粘土ブロック、黄褐色殻、炭化殻を多く含む。(耕作土)
 - 5. 褐色土 粘土、炭化殻を多く含む。(耕作土)
 - 6. 暗褐色土 粘土、炭化殻を多く含む。褐色の粘土質ブロックを多く含む。0.5cm大の小石を多く含む。
 - 7a. 褐色土 柔らかい。粘土、炭化殻、褐色土ブロック、黄褐色殻を多く含む。
 - 7b. 濃い黄褐色土 炭化殻、0.5cm大の小石を多く含む。一部黄褐色土ブロックを含む。
 - 8. 褐色土 炭化殻を多く含む。褐色の粘土質ブロックを多く含む。
 - 9. 褐色土 ややしめる。粘土、炭化殻、0.5～1.0cm大の小石を多く含む
 - 10. 暗褐色土 しまる。粘質、粘土、炭化殻を多く含む。
 - 11. 褐色土 粘くしめる。粘質、炭化殻を多く含む。一部黄褐色土ブロックを含む。
 - 12. 褐色土 ややしめる。粘土、炭化殻を含む。
 - 13a. 暗褐色土 やや粘質。粘土、炭化殻を多く含む。
 - 13b. 暗褐色土 粘質、ややしめる。粘土、炭化殻を多く含む。
 - 14. 暗褐色土 砂、炭化殻、0.5cm大の小石を多く含む。
 - 15. 暗褐色土 やわらかい。粘多量を含む。褐色の粘土質ブロックを少量含む。
 - 16a. 暗褐色土 砂、炭化殻、0.5cm大の小石を多く含む。一部褐色土ブロックを含む。
 - 16b. 暗褐色土 ややしめる。炭化殻を含む。
 - 17. 暗褐色土 薄い粘質土、かたくしめる。(地山a)
 - 18. 褐色土 粘質、0.5～1.0cm大の小石を少量含む、やや粘質 (地山b)
 - 19～22. ややしめる。(地山c)
 - 23～35. 粘質土 (地山d)

IV区



- IV区
- 1. 暗褐色土 よくしめる。粘土、炭化殻を多量に含む(厚層による粘圧)
 - 2. 暗褐色土 ややしめる。1層にのみ小石埋入土ブロックが混入する。
 - 3. 暗褐色土 ややしめる。粘土、炭化殻を多量に含む(黄土、耕作土)
 - 4. 褐色土 3層互にはしめる。黄粘土、炭化殻を多量に含む(黄土、耕作土)
 - 5. 褐色土 粘土質、よくしめる。黄褐色土、褐色殻を少量含む(地山)
 - 6. 黄褐色土 粘土質。(地山)



第28図 深迫門地区Ⅲ・Ⅳ区レンチ土層図

となる深迫門地区Ⅲ区には13×10mのトレンチを、下段の深迫門地区Ⅳ区には16×8mのトレンチをそれぞれ設定した。なお、平坦部北寄りとしたのは、調査の影響で、崖地の崩落などが生じないように堀切集落に対して配慮した結果である。その後、地山の堆積状況を確認するため、1.5m幅のトレンチを、Ⅲ区トレンチでは南東隅から南に向かって20m分、Ⅳ区トレンチでは南西隅から南に向かって8.0m分、西に向かって14.0m分延長して調査を実施した。〔第27図〕

2 遺構について

各トレンチにおける調査の成果について、以下に記述する。〔第28図〕

1) Ⅲ区トレンチ

表土剥ぎの段階で、深さ10cm程度のところで固くしまった地山と思われる粘質土を確認し、南東隅より20.0m延長した部分においても同様に、強い粘質の地山と思われる土を確認した。その上面には、造園用の木の苗木を植えたと思われる穴が規則正しく並んだ状況が認められた。その後、平面精査により、いくつかの土坑らしきものを確認したが、結果的に、そのすべてが植木を掘り上げる際の重機による穴であることが明らかとなった。また、北東部分で硬化した面を確認したが、その面には少し盛り上がった軟状のものがあり、そこには植木穴より小さめの穴が並んでいた。

こうした状況の中、地山がどうか判然としなかったため、トレンチ南・西・北壁面に沿って小トレンチを設定して基本的な土層を把握することとした。

これら小トレンチの土層確認の結果、地山が北側の市道に向かって急傾斜で下降することが判明した。これは、市道を挟んだ北側の谷部に繋がる谷地形を表しており、当該平坦地が後世の造成で形成されたものであることが明らかとなった。しかし、トレンチ北壁面を掘削するなかで、北東部の床面部分、地山となる面に5基の穴を平面的に確認した。それ以上の調査は実施しなかったが、植木の掘り込みとはレベルが大きく異なることや埋土は黒褐色をしていたため、何らかの遺構の可能性は残る。

2) Ⅳ区トレンチ

表土剥ぎの段階で、特に東側のごく浅いところで地山と思われる固い粘質土を確認した。その後の掘削で、西に向かって地山が緩やかに下降していく状況が認められた。また、平面精査により遺構等は確認できなかった。

以上の各トレンチにおける調査の結果、上下2段の平坦地は、もともと東から西に向かって緩やかに下降する傾斜地形であったことが考えられる。北側も同様で、後世の造成により現在の地形が形成されたことが明らかとなった。

3 出土遺物

遺物の出土はほとんど無く、数点認められた土器はいずれも細片で、時期を特定できるような状況ではなかった。

表 遺物観察表

第18図

No.	出土地点	層	種類・部位	計測値 (cm)	色 調 (内/外)	胎土	図 章・文 様			焼成	備 考
							外器面	内器面	口縁・底部		
1	池田41号レンテ ②T No.1	地上直下	須恵器 杯蓋 口縁部	器高(1.4) 底径(0.5)	(内)灰 (外)灰白	細砂粒少量	ココナデ	ココナデ	ココナデ	不整形	
2	池田41号レンテ ②T No.7		須恵器 高台付坪 器蓋～体部	器高(1.5) 底径(0.4) 高台径(0.6) 高台高(0.5) 器蓋(0.5)～(0.9)	(内)灰 (外)灰	砂粒多量	ココナデ	不整形方向ナデ	ヘラ印付		良
3	百瀬水跡	表層	須恵器 高台付坪 器蓋～体部	器高(1.5) 底径(0.8) 高台径(0.8) 高台高(0.6) 器蓋(0.4)～(0.5)	(内)灰 (外)灰	砂粒多量	ココナデ	不整形方向ナデ	ヘラ印付痕ナデ		良
4	池田41号レンテ ②T No.7		須恵器 高台 器蓋	器高(2.5) 器高(1.0)	(内)灰 (外)焼成～ 灰青地	細砂粒中量	ココナデ	ココナデ			良
5	池田41号レンテ ②T No.1	4層	須恵器 器蓋	器高(3.0) 器高(1.1)	(内)灰 (外)灰	緑～中砂粒多量	ココナデ ヘラタテ	ココナデ	ココナデ		良
6	池田41号レンテ ②T No.5	4層	須恵器 器蓋	最大径(3.4) 最大径(3.5) 器高(0.9)	(内)灰 (外)灰	細砂粒少量	緑瑠璃子貝タタキ ナデ	同心円 当て具痕			良
7	池田41号レンテ ②T No.9		須恵器 器蓋	最大径(6.0) 最大径(6.3) 器高(1.1)～(1.2)	(内)灰 (外)灰	細砂粒多量	平行タタキ	同心円 当て具痕			良
8	池田41号レンテ ②T No.3	5層	須恵器 器蓋	最大径(6.0) 最大径(6.0) 器高(0.6)～(0.8)	(内)灰 (外)灰	細砂粒少量	平行タタキ ナデ	同心円 当て具痕			良
9	池田41号レンテ ②T No.23		須恵器 器蓋	最大径(6.1) 最大径(6.2) 器高(1.0)～(1.1)	(内)灰 (外)灰	細砂粒少量	平行タタキ	同心円 当て具痕			良
10	池田41号レンテ ②T No.7	5層	須恵器 器蓋	最大径(6.0) 最大径(3.6) 器高(1.0)～(1.3)	(内)灰 (外)輝灰	細砂粒少量	平行タタキ	同心円 当て具痕			良
11	百瀬水跡	一統	須恵器 器蓋	最大径(6.3) 最大径(10.4) 器高(1.0)～(1.3)	(内)灰 (外)灰	細砂粒少量	緑瑠璃子貝タタキ ナデ	同心円 当て具痕			良
12	池田41号レンテ ②T	一統	須恵器 器蓋	最大径(6.7) 最大径(11.4) 器高(0.7)～(0.9)	(内)にぶい・焼 (外)にぶい・焼	砂粒少量	縦方向の平行タタキ ナデ	同心円 当て具痕			良

第19図

No.	出土地点	層	種類・部位	計測値 (cm)	色 調 (内/外)	胎土	図 章・文 様			焼成	備 考
							外器面	内器面	口縁・底部		
1	池田41号レンテ	一統	土師器 坪	口径(1.5) 底径(0.6) 高さ(4.2) 器高(0.4)～(0.6)	(内)にぶい・焼 (外)にぶい・焼	細砂粒多量	ココナデ	ココナデ	ココナデ	不整形	内底面に赤色 顔料が付着
2	池田41号レンテ ②T	一統	土師器 高台付坪 器蓋	器高(2.1) 高台高(0.6) 高台径(0.6)～(1.0) 器蓋(0.4)～(1.0)	(内)にぶい・黄緑 (外)にぶい・黄緑	細砂粒少量	ココナデ	ココナデ	ココナデ		良 内外器面に に、赤色顔料 が付着
3	百瀬水跡 (南朝院)	表層	土師器 瓶蓋	最大径(7.3) 最大径(0.1) 器高(1.1)	(内)にぶい・黄緑 (外)にぶい・黄緑	砂粒多量	ナデ	指オケエ			良 保存層
4	池田41号レンテ ②T	一統	土師器 瓶蓋 口縁～器蓋	口径(0.5) 器高(5.3) 胴部最大径(2.1)	(内)にぶい・焼 (外)にぶい・黄緑	細砂粒多量 赤砂粒少量	ヘラタテ ココナデ	ココナデ	縦方向のナデ		良
5	池田41号レンテ ②T	一統	土師器 瓶蓋 口縁～器蓋	口径(0.7) 器高(0.4) 胴部厚(1.0) 胴部径(1.3) 胴部径(1.8)φ 胴部最大径(2.4)	(内)にぶい・焼 (外)にぶい・焼	緑～小砂粒多量	ココナデ	斜方向のナデ	指部 ココナデ		良

第20図

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色 調 (内/外)	胎土	調 整 ・ 文 様			焼成	備 考
							外面	内面	調整部分		
1	遺跡411トレンチ ⑤T No.24	12層	瓦葺 灰・銅線部	最大長(12.1) 最大幅(9.1) 厚さ(1.5~2.2)	(△)黒褐色 (四角)灰灰	砂粒少量	ナデ	右目正直 ナデ	(銅線部) へう調整	良	
2	遺跡411トレンチ ⑤T No.17		平瓦 銅線部	最大長(13.1) 最大幅(10.5) 厚さ(1.3~2.4)	(四角)灰 (△)灰	小へ大砂粒中量	ナデ	右目正直 ナデ	(銅線部) へう調整	良	4.0~4.7cmの横脊
3	遺跡411トレンチ ⑤T No.1		平瓦 鉄線部	最大長(7.5) 最大幅(4.8) 厚さ(1.1~1.8)	(四角)灰 (△)灰	砂粒少量	ナデ	右目正直 横脊ナデ	(鉄線部) へう調整	良	
4	遺跡411トレンチ No.9		平瓦 鉄線部	最大長(11.3) 最大幅(8.7) 厚さ(1.5~2.3)	(四角)灰 (△)灰	砂粒少量	ナデ	右目正直 ナデ	(鉄線部) へう調整	良	1.5~1.8cmの横脊

第21図

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色 調 (内/外)	胎土	調 整 ・ 文 様			焼成	備 考
							外面	内面	口縁・底部		
1	遺跡411トレンチ No.6		土師質土器 小皿	口径(8.0) 底径(6.4) 高さ(1.0)	(内)橙 (外)黄	細砂粒少量	ココナデ	ココナデ		良	
2	遺跡411トレンチ ⑤T No.16	24層	土師質土器 小皿	口径(9.3)	(内)にぶい・橙 (外)にぶい・橙	細砂粒少量	ココナデ	ココナデ	(底面) へう切り後ナデ	良	外縁面に右目正直の横脊
3	遺跡411トレンチ ⑤T No.16	30層	土師質土器 杯	口径(7.0) 底径(2.3)	(内)にぶい・橙 (外)にぶい・橙	砂粒少量	へうケツリ ココナデ	ココナデ		良	
4	遺跡411トレンチ ⑤T	一話	土師質土器 杯	口径(14.0) 底径(9.2) 高さ(2.0)	(内)にぶい・橙 (外)にぶい・橙	細砂粒少量	ココナデ	ココナデ		良	
5	遺跡411トレンチ ⑤T No.17	30層	土師質土器 外	最大長(3.3) 最大幅(4.2) 底径	(内)にぶい・橙 (外)にぶい・橙	砂粒少量	ココナデ	ナデ	(底面) 金切り後ナデ	良	
6	遺跡411トレンチ No.8	表土	白磁 杯	口径(2.3) 高さ(0.4)	(内)灰白 (外)灰白					良	
7	遺跡411トレンチ ⑤T No.2	4層	青磁 杯	口径(1.8) 厚さ(0.6)	(内)オリーブ灰 (外)オリーブ灰			墨彩文		良	
8	遺跡411トレンチ No.10		青磁 杯	口径(2.0) 厚さ(0.3)	(内)オリーブ灰 (外)オリーブ灰			沈線文	文様(不明)	良	
9	遺跡411トレンチ ⑤T No.8		青磁 杯	最大長(2.1) 最大幅(0.5) 厚さ(0.5)	(内)オリーブ灰 (外)オリーブ灰					良	
10	遺跡411トレンチ	一話	瓦質土器 六線 鉄線	口径(9.3) 厚さ(1.8~1.4)	(内)にぶい・黄橙 (外)にぶい・黄橙	中砂粒少量	ナデ	ナデ	(△)常部 墨彩付	良	

第26図

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色 調 (内/外)	胎土	調 整 ・ 文 様			焼成	備 考
							外面	内面	調整部分		
	遺跡門1区 23トレンチ		平瓦 銅線部	最大長(11.4) 最大幅(12.1) 厚さ(1.8~3.1)	黄褐色 (外面)にぶい・黄橙	緑へ大砂粒少量	ナデ	右目正直 ナデ	(銅線部) へう調整	良	3.0cm幅の横脊

第三章 調査のまとめ

第29次調査においては、計5箇所調査区を設定して調査を実施した。その結果、南側土塁線東端平坦部における版築盛土の一部の検出、貯水池跡池尻部において石積みを伴う環境の存在の示唆、深迫門地区に所在する平坦地が後世の造成により整形された地形であることが判明するなど、各調査区において成果を挙げた。特に、南側土塁線東端平坦部及び貯水池跡池尻部においては、鞠智城の構造解明につながる大きな成果となった。ここでは、鞠智城跡の外郭線及び貯水池跡の池尻部について、その構造についてまとめる。

第1節 鞠智城跡の外郭線について

1 南側土塁線東端平坦部の土塁について

南側土塁線東端平坦部において、奥行6.3m、頂部から下1.0mの範囲で版築盛土を検出した。土塁裾部の検出までは至っていないため土塁高及び段築成等については判然としなない。第23次の南側土塁線西端部（B地点）の調査において、南面する土塁の形状について、土塁中位に棚状の平坦面を持つ2段築成の土塁が検出されているが、当該地点は南側に派生する支尾根を遮断する箇所となり、B地点6トレンチで検出した段を持たない土塁である可能性もある。

内部構造については、頂部より約60cm下までは、地山を鉤状にカットし、その上に盛土する内托構造となるが、上端部約60cm程は、やや内傾斜となる夾築式に盛土した構造となる。これも、B地点6トレンチと同じ構造を示す。また、盛土が大きく3段階に区分できることを指摘したが、夾築式の盛土部分は、内托式の部分とはしまり具合、材質等に差異があるなど、盛土の手法に違いを見せる。土塁盛土内に見られた不整形の柱穴は、版築工法に伴う前面支柱の控え柱のものと考えられるが、内托構造の盛土の際に使用されたもので、夾築部分は別の手法で構築された可能性が高い。

盛土材については、基盤面である阿蘇溶結凝灰岩（火砕流堆積物）をベースとした土で、地山の整形時に生じた発生土を選別して使用した状況が読み取れる。使用土については、当該地点において初めての検出となる。鞠智城の土塁の場合、傾斜や高低差、基盤面など、それが立地する自然地形を考慮した工法で構築され、土塁の整形時に発生した土等を使用するため使用土は各地点の基盤面に左右されることを特徴とすることがこれまでの調査で明らかとなっている。今回、こうした想定を補強した形となった。また、夾築部分は粘質土を主として使用しており、雨水等の浸透を防ぐための所作と判断できる。

2 鞠智城跡の外郭線に関する諸問題

今回の調査地点は、版築土塁を検出した第23次調査の西端部から約500m離れた同一尾根線上となり、南側土塁線の東端部となる。この区間は、土塁的景観を色濃く残す地形的な微隆起が多く認められることから土塁線として位置付けてきたわけであるが、これまで、西端部を除き調査により確認してきたわけではない。しかし、今回の東端における版築盛土の発見は、土塁線すべてに土塁が築かれていた可能性を示唆するものである。

南側土塁線の南側斜面は、阿蘇溶結凝灰岩の侵食作用により切り立った崖面を形成しており、それだけでも侵入困難な地形となる。従来は、崖線で囲繞するラインとして位置づけられていたが、第23次と当該次の調査によって土塁が築かれていた可能性が高くなったのである。このことは、崖線で囲繞するとされる南-

東にかけての外郭線上においても同様で、土塁と崖線で囲繞とする従来の見解を見直す必要が生じてきたものと考えられる。他の地点の調査を重ねることが今後の課題といえる。

第2節 貯水池跡の池尻部について

今回の調査は、41トレンチ内に設定した小トレンチによって貯水池の池尻部の構造を把握するという目的で実施してきた。調査にあたっては41トレンチ南部の高まりがほぼ中世以降の堆積だということが判明した時期が遅く、十分な調査は行えていない。そのため、明らかとなった内容は多くはないが、以下に、見えてきた構造等についてまとめる。

1 堤について

幾つかのトレンチ調査によって確認されたものに堤状の遺構がある。これまでの貯水池跡における調査においては、池頭部と池尻部のレベル差が約9mあり、大きな堤ではなく幾つかの小規模な堤によって水量調節が行われていたと考えられた。今回は、それら貯水池跡の堤の最終的なものとして位置づけている。

41トレンチの②、⑤、⑩トレンチにおいては水平堆積する一連の盛土が確認された。この盛土は、整形されたような地山の上に存在している。その地山には、北側水路内において直線的な整形跡と考えられる部分もある。また、盛土の前面となる水路となっている部分には基礎石となりそうな大きな石が存在し、その周辺には小さい石が散在している。

これらのことから、今回の調査部分には、城外側では花崗岩の地山を段状に整形し、基礎となる大きな石を、後ろにグリ石を詰めながら並べた石積み、その上に版築工法を使った盛土が存在していたであろうということが考えられる。当時そのような構造で築造された堤が、貯水池の氾濫や後世の土地利用の変化による造成等によって壊され、現在のレベルまでのみ残っていると思われる。

また、堤状の遺構の城内側、池側において確認された石を敷き詰めたような部分が帯状に存在し、池跡の水成粘土がその付近で途切れることが確認された。このことについては、この帯状の石の集まりが堤の内側部分の基礎石か、もしくは池岸の護岸であったのではないかと考えられる。

しかし、堤と考えられる部分の地山は、場所によっては挟られたような部分があり、堤の基礎造りという目的のみで整形されたのが明確にはできない。また堤内側の石敷き上に粘質土を確認したが、41トレンチ南部の高まり部分の土とどのような間わりがあるのかまでは把握できなかった。

今回の41トレンチにおける堤と思われる部分については、今後、⑩トレンチ周辺やトレンチ外の西側部分など、尾根との繋がり部分に調査を広げていけば、構造等についての新たな事実が判明すると思われる。

2 池跡の範囲

池の範囲については、第19次調査の20トレンチまでは、地山と青灰色粘土の境として把握されていた。そこから北の部分においては推定ラインとしていたが、今回の調査でおおよそのラインを把握した。

第19次調査20トレンチ内の地山と青灰色粘土の境のラインは、④トレンチや⑦トレンチにおいても確認できた。さらに、それらのトレンチでは地山の内側に石敷きのような部分が確認されており、この点についても池の範囲を確認する際の参考点とした。④トレンチ以北については、①、②、⑤、⑩トレンチ内で盛土の内側に存在する帯状の石敷きのようなものが見つかったこと、そして、青灰色粘土がそれより城外側に見られないことから、ほぼそのラインでいいと考えられた。

平面的にみると、以前推定されたラインより若干内側に入り込み形となり、東側の尾根部分にむかって先細

りのラインとなると考えられる。ただし、41トレンチ内においても南北では若干のレベル差があるため、実際に池が存在した当時の水面レベルがどの程度であったのか、今後、これまでの調査区との繋がりや未調査区の調査成果をまっ、関連性をもった結果を出していく必要がある。

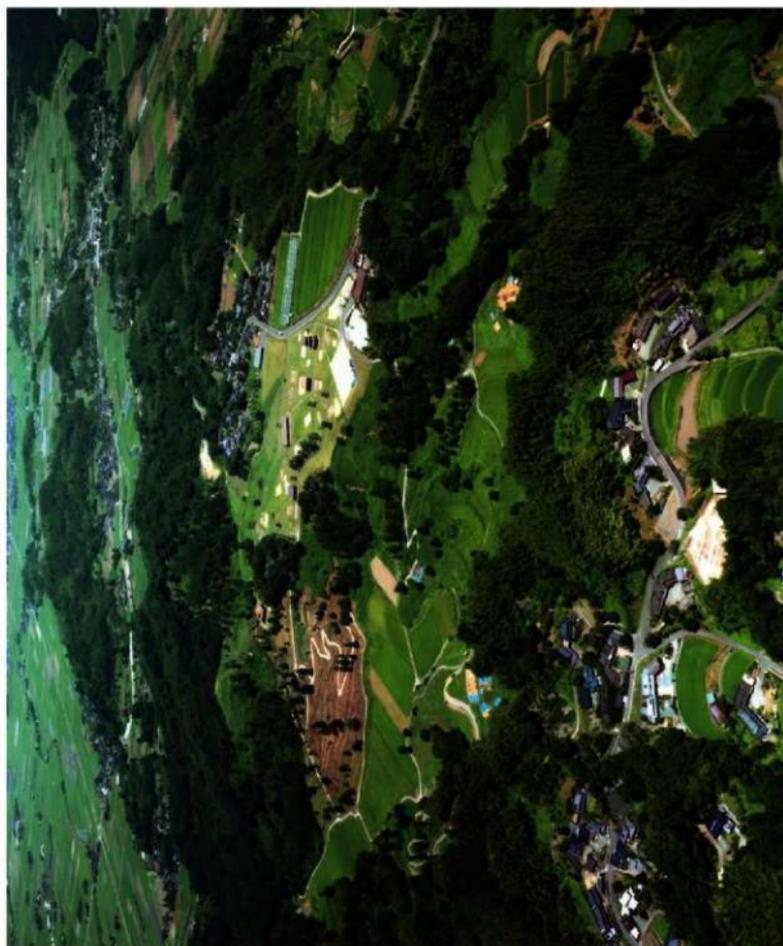
以上、特に2点について調査の成果をまとめたが、本調査を進めていくうえで、存在しているだろうと思われる遺構の全体像をなかなかつかむことができず、十分に効果的な調査ができたとはいえない。しかし、今回の調査によって、これまでとらえることのできなかった貯水池跡の池尻部における遺構等について、手がかりとなる資料が少しずつ確認されてきている。

現在実施中の第30次調査において、さらなる成果が期待される。

〔引用・参考文献〕

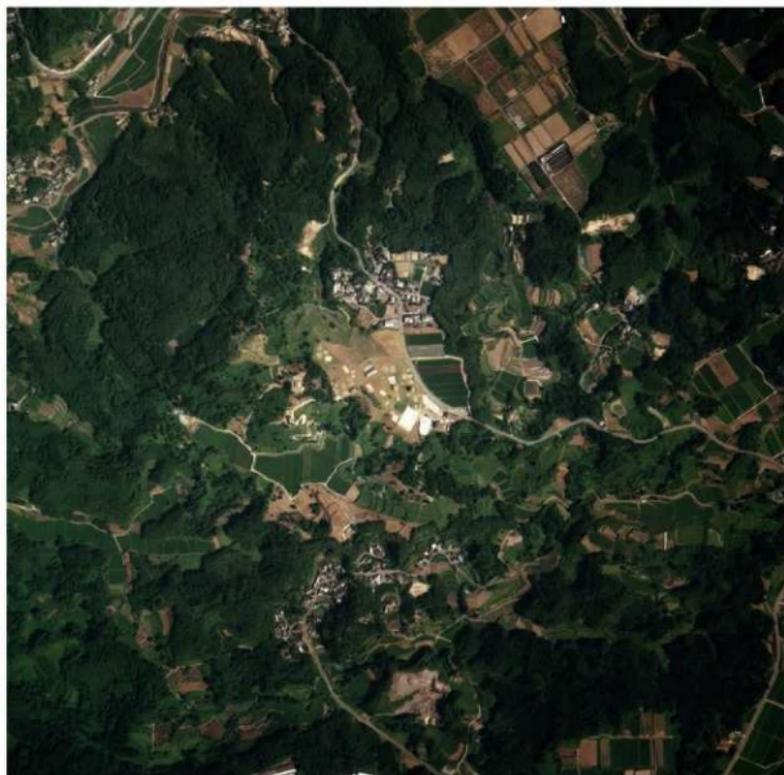
- 熊本県教育委員会編 1991 熊本県文化財調査報告第116集 『鞠智城跡—第10～12次調査報告—』
熊本県教育委員会編 1998 熊本県文化財調査報告第169集 『鞠智城跡—第19次調査報告—』
熊本県教育委員会編 1999 熊本県文化財調査報告第181集 『鞠智城跡—第20次調査報告—』
熊本県教育委員会編 2000 熊本県文化財調査報告第191集 『鞠智城跡—第21次調査報告—』
熊本県教育委員会編 2002 熊本県文化財調査報告第207集 『鞠智城跡—第22次調査報告—』
歴史公園鞠智城・温故創生館編 2003 『鞠智城跡—第23次調査報告—』
歴史公園鞠智城・温故創生館編 2004 『鞠智城跡—第24次調査報告—』
歴史公園鞠智城・温故創生館編 2005 『鞠智城跡—第25次調査報告—』
歴史公園鞠智城・温故創生館編 2006 『鞠智城跡—第26・27次調査報告—』
歴史公園鞠智城・温故創生館編 2007 『鞠智城跡—第28次調査報告—』

写真図版



鞠智城跡全景（南東から）

图版 2



鞠智城跡（垂直）



深迫門跡周辺調査区全景（西から）

図版 4



貯水池跡調査区全景（北から）



貯水池跡調査区全景（南から）

南側土塁線東端平坦部
トレンチ全景
(北から)



深迫門跡西側一帯調査区全景
(垂直)



図版 6



土壘検出状況（北東から）



土壘検出状況（北から）



土壘版築状況（西から）



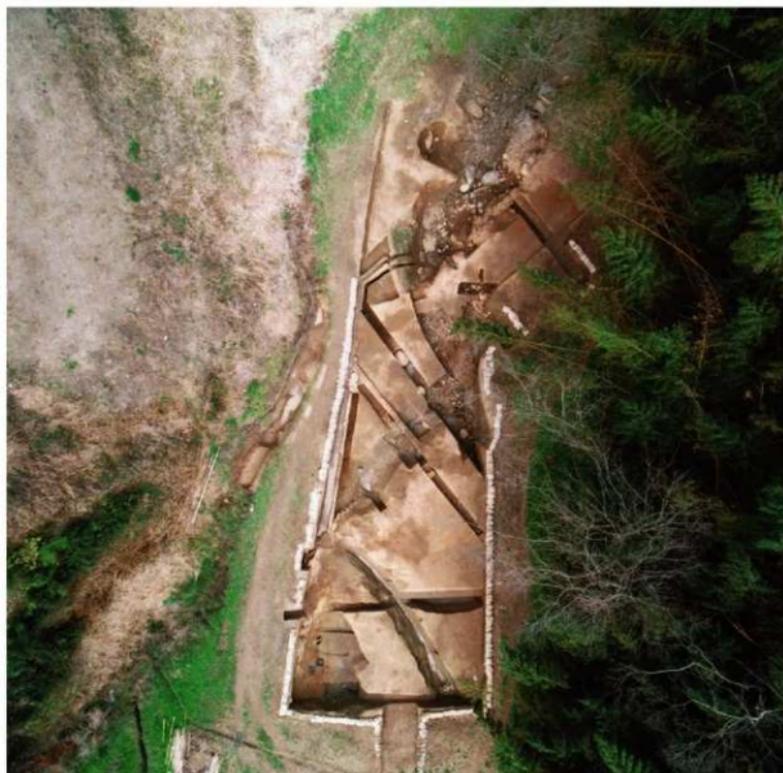
土壘南側断面（北西から）



土壘中央断面（北西から）



土壘北側断面（北西から）



貯水池跡 41 トレンチ全景 (垂直)

①トレンチ土層断面a
(西から)



①トレンチ土層断面b
(西から)



①トレンチ土層断面c
(西から)





①トレンチ土層断面 d
(西から)

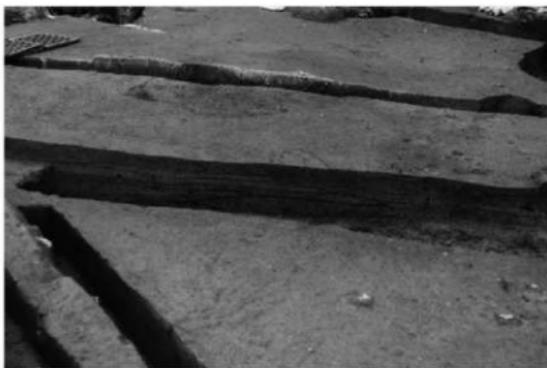


①トレンチ土層断面 e
(西から)



②トレンチ土層断面 a
(南西から)

②トレンチ土層断面b
(南西から)



②トレンチ礫群
(南東から)



②トレンチ礫群
(南西から)





④トレンチ地山確認状況
(東から)



④トレンチ地山確認状況
(南から)



④トレンチ延長分掘り下げ状況
(東から)

⑤トレンチ土層断面 a
(南西から)



⑤トレンチ土層断面 b
(南西から)



⑤トレンチ土層断面 c
(南西から)





⑤トレンチ土層断面 d
(南西から)



⑥トレンチ完掘状況
(南から)



⑦トレンチ土層断面
(東から)

⑦トレンチ掘り下げ状況
(北西から)



⑦トレンチ土層断面
(南から)



第19次調査20トレンチ部分
(南から)





⑩ トレンチ (南東から)



⑪ トレンチ (南東から)



北側水路南壁 a (北西から)



北側水路南壁 b (北西から)



北側水路南壁 c (北西から)



北側水路北壁 (南東から)



北川水路全景（南西から）



深迫門地区Ⅰ区全景（南から）



Ⅰ区-1 トレンチ土層断面
（北西から）

I区-2 トレンチ土層断面
(南西から)



I区-3 トレンチ土層断面
(南西から)



深迫門地区II区全景
(北東から)





Ⅱ区-1 トレンチ平面
(南から)



Ⅱ区-2 トレンチ土層断面
(南から)



Ⅱ区-3 トレンチ土層断面
(南から)

Ⅱ区-4 トレンチ平面
(南から)

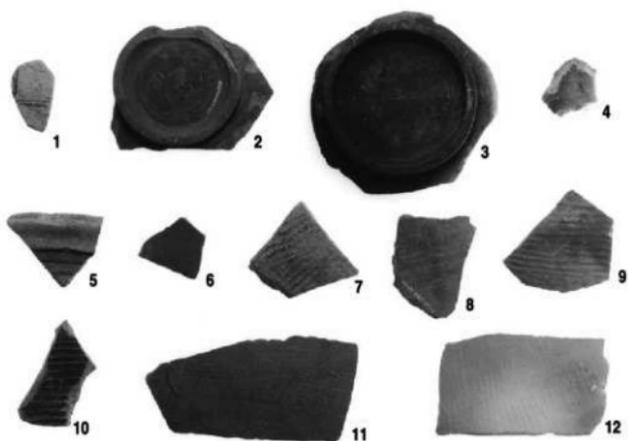


深迫門地区Ⅲ区 トレンチ全景
(東から)

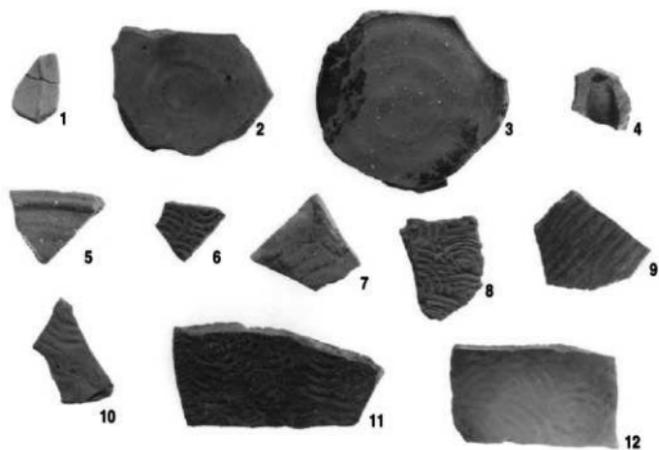


深迫門地区Ⅳ区 トレンチ全景
(東から)

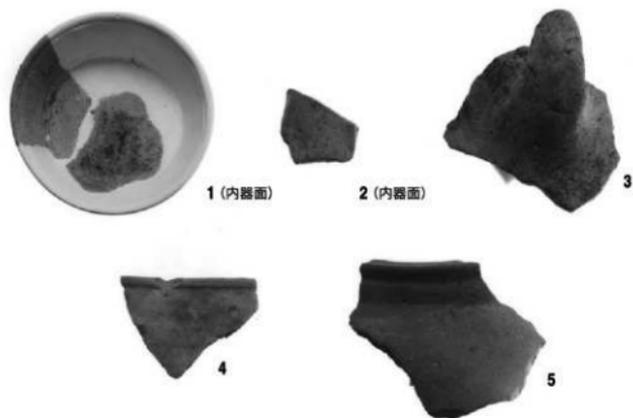




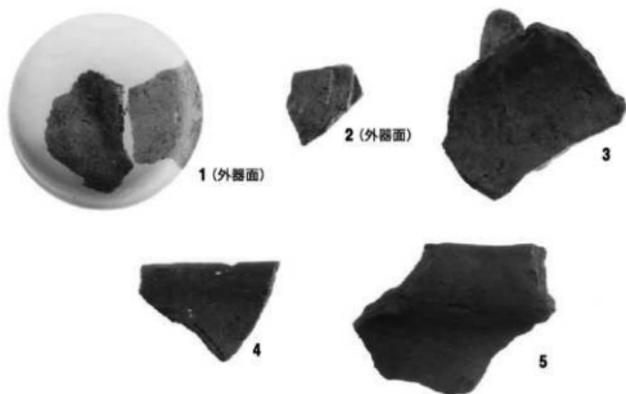
須惠器 (外器面)
※第 18 図



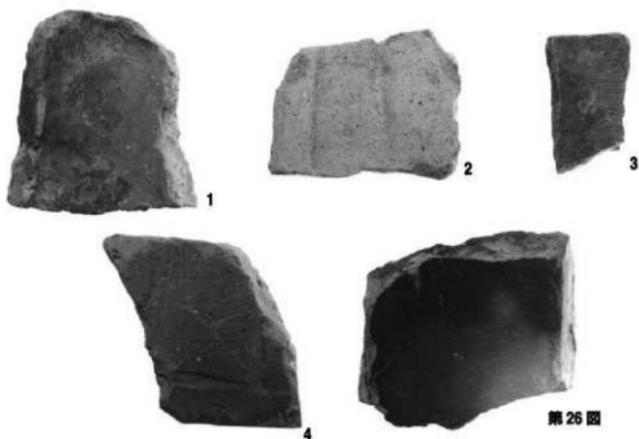
須惠器 (内器面)
※第 18 図



土師器 (外器面)
※第 19 図



土師器 (内器面)
※第 19 図



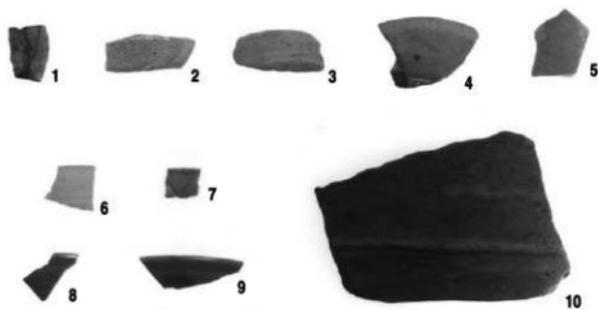
第 26 图

瓦 (凹面)
※第 26 图を除き 第 20 图

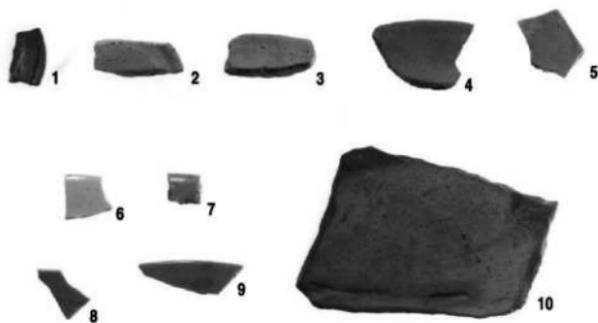


第 26 图

瓦 (凸面)
※第 26 图を除き 第 20 图



その他の遺物（外器面）
※第 21 図



その他の遺物（内器面）
※第 21 図

報告書抄録

ふりがな	きくちじょうあと							
書名	鞠智城跡							
副書名	第29次調査報告							
巻次								
シリーズ名	鞠智城跡調査報告							
シリーズ番号								
編著者名	矢野裕介・長尾至明							
編集機関	熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館							
所在地	熊本県山鹿市菊鹿町米原 443-1							
発行年月日	2009(平成21)年3月18日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くにしていしせき 国指定史跡 きくちじょうあと 鞠智城跡	くまもとけん 熊本県 (43)	やまがし 山鹿市 (208)	100	33° 00' 13" 568	130° 47' 14" 747	2007.07.03 ~ 2008.03.28	2,100	遺跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鞠智城跡	城跡	古代	土塁 貯水池跡		瓦、須恵器、 土師器		南側土塁線で版築 土塁を検出 貯水池跡で池の 範囲を確認	

鞠智城跡

— 第29次調査報告 —

平成21年3月18日

編集発行 熊本県立装飾古墳館分館
歴史公園鞠智城・温故創生館
〒861-0425 熊本県山鹿市菊鹿町米原443-1
TEL (0968) 48-3178

印刷 株式会社 大和印刷所
〒861-8031 熊本市戸島町920-11
TEL (096) 380-0303(代表)

20 教委 熊古

② 001

この電子書籍は 鞠智城跡 第 29 次調査報告 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡 第 29 次調査報告

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2022 年 6 月 15 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>